

II 平城京・京内寺院等の調査

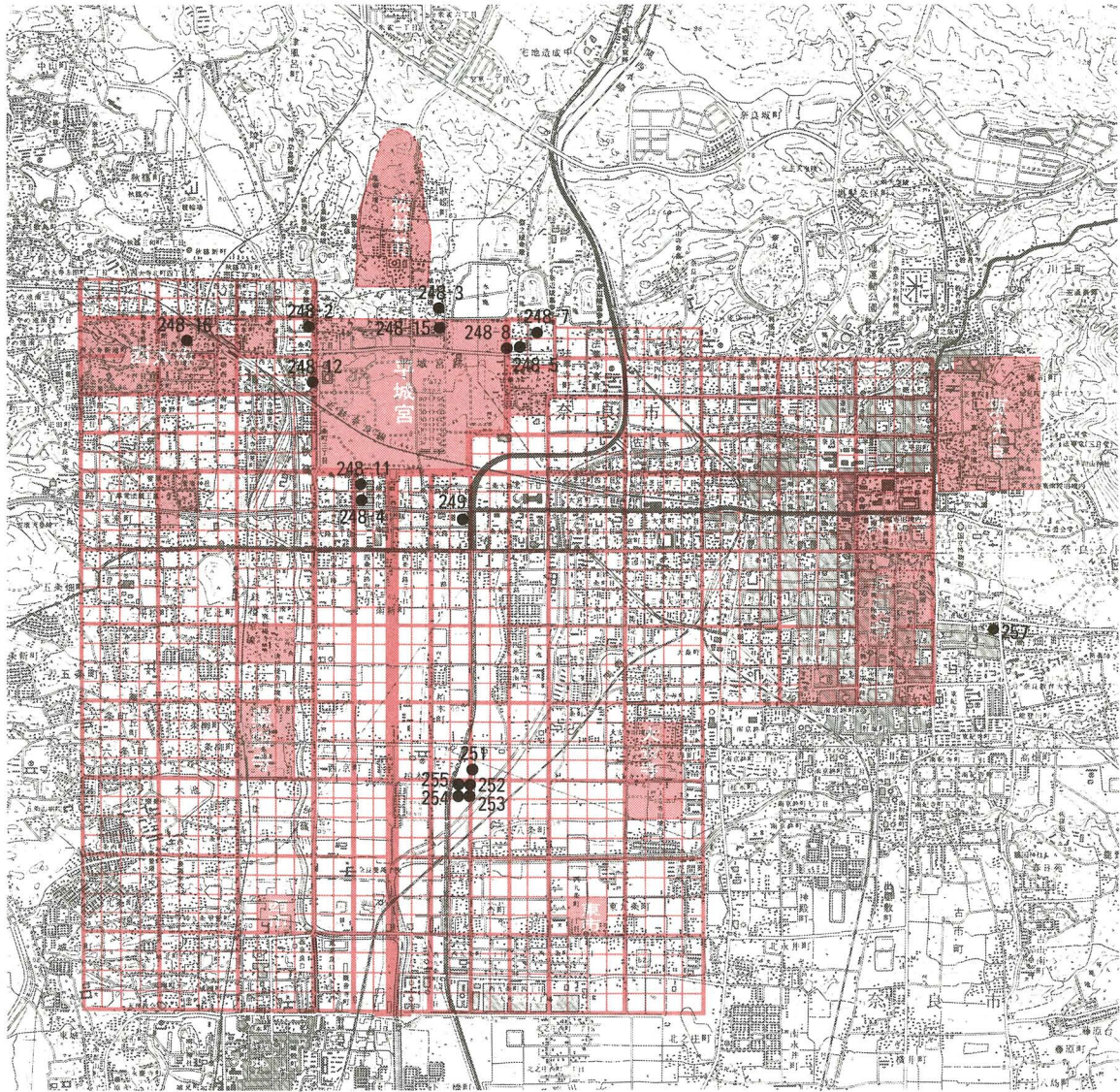


図21 1994年度平城京等発掘調査位置図 1:50000

表3 1994年度平城京内発掘調査遺跡一覧 (*印は巻末表5に概要を掲載)

次数	遺跡名	地区	発掘期間	面積(m ²)	担当者	申請者	頁
248-2	右京一条一坊一坪(西一坊大路)	6AGA	1994. 6. 13. - 6. 28.	96	玉田 芳英	大西恵津子/佐紀町	62
248-3	平城宮北方(平城陵)	6ASB	1994. 7. 17. - 19.	14	毛利光俊彦	梶木祥三/佐紀町	*
248-4	右京三条一坊(西一坊坊間路)	6AFG	1994. 8. 1. - 8. 8.	52	館野 和巳	木瀬利秋/二条大路南町	*
248-5	左京一条二坊十坪	6AFC	1994. 8. 22. - 8. 30.	36	岸本 直文	柴田啓子/法華寺町	56
248-7	左京一条二坊十六坪	6AFC	1994. 9. 17. - 9. 30.	187	山岸 常人	阪神不動産/法華寺町	58
248-8	左京一条二坊十坪	6AFC	1994. 10. 12. - 10. 20.	96	杉山 洋	村田憲重/法華寺町	*
248-11	右京三条一坊八坪	6AGF	1994. 11. 7. - 11. 10.	23	白杵 勲	佐藤 茂/二条大路南町	63
248-12	右京一条二坊四坪	6AGA	1994. 11. 28. - 12. 26.	324	杉山 洋	中西安男/二条町	60
248-14	平城宮西方(西一坊大路)	6AGA*6ADC	1994. 1. 9. - 1. 13.	95	寺崎 保広	片岡医院/二条町	64
248-15	市庭古墳	6AAN	1994. 1. 18. - 1. 25.	82	加藤 真二	奈良市水道局/佐紀町	25
248-16	西大寺旧境内	6BSD	1994. 1. 25. - 2. 2.	67	高瀬 要一	西大寺	*
249	左京三条一坊十四坪	6AFJ	1994. 4. 4. - 5. 23.	620	小林 謙一	トーヨー	26
251	左京六条・東一坊大路	6AHC*6AHD	1994. 5. 31. - 6. 21.	225	浅川 滋男	ヒラサワ	55
252	左京七条一坊十六坪	6AHH	1994. 6. 21. - 10. 26.	3900	内田 和伸	ヒラサワ	28
253	左京七条一坊十五、十六坪	6AHH*6AHD	1994. 10. 13. - 12. 27.	3730	長尾 充	ヒラサワ	28
254	左京七条一坊十五、十六坪	6AHH	1995. 1. 9. - 3. 31.	3700	岩永 省三	ヒラサワ	28
255	左京七条一坊十六坪	6AHH	1995. 2. 21. - 3. 31.	2500	加藤 真二	ヒラサワ	28
257	頭塔	6BZT	1994. 11. 14. - 1995. 3. 31.	解体修理	小野 健吉 高瀬 要一	奈良県	59

II - 1 市庭古墳前方部・周濠の調査 第248-15次

本調査は佐紀東町内の下水埋設にともなう事前調査である。下水管敷設に先行するマンホールの埋設時の立会調査で、周濠の落ち込みが確認されたため、発掘調査を実施した。

調査範囲は、市庭古墳前方部を中央から東に横断する道路上の東西約85m、南北約1.2mの範囲である。地山層もしくは奈良時代の整地層上面まで掘り下げた後、遺構検出をおこなった。その結果、No.2マンホールを中心に、古墳周濠の掘りこみが始まり、それ以东には周濠を埋める奈良時代の整地層が厚く堆積することを確認した。これ以外には、No.3のマンホールで土坑1基を確認したほか、多量の瓦を包含する南北溝1条、小土坑5基を検出した。

古墳周濠は、せまい平坦面をはさみながら、約30°の勾配で地山層を掘込みつつ傾斜していく。周濠埋土のうち、地山に直接のる暗茶褐色土には、人頭大ないし拳大の礫が多数包含されている。礫の明解な据え付け状況が確認できなかったことから、葺石ではなく周濠当初の埋土とみなした。また、この層の上のり、徐々に厚さを増していく茶褐色土を主体とする土層群は、新しい時期の土器片をふくむことから、平城宮建設にともなう奈良時代の整地層と考えられる。なお、No.1マンホール東で簡易ボーリング調査をおこなったが、深さは2m以上あり、試掘しても濠の底に達しなかった。

今回の調査の結果、市庭古墳東造出部の周濠位置の詳細が判明した。また、周濠の東の立ち上がりについては、今回の調査では確認できなかったが、本調査区と第223-7次調査区とのあいだの、数m中にあると推定することができよう。(加藤真二)

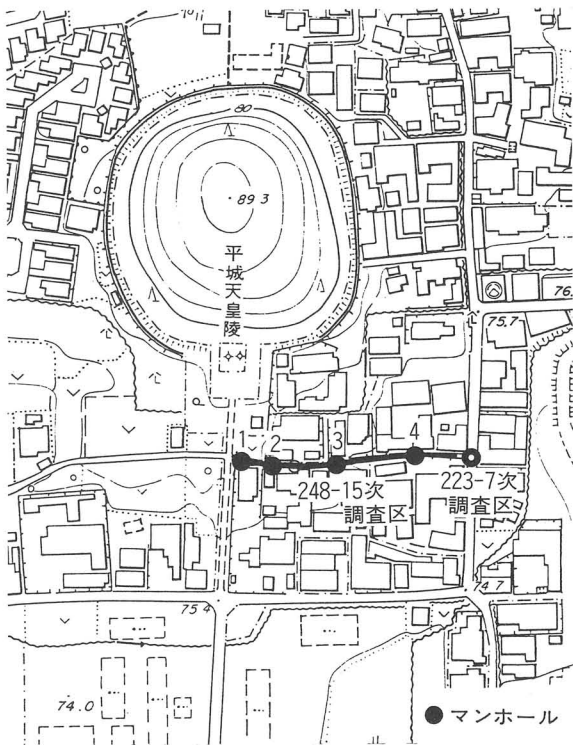
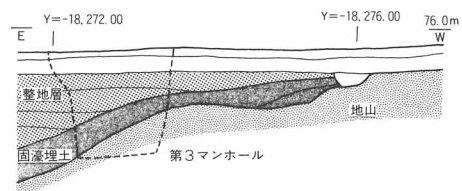
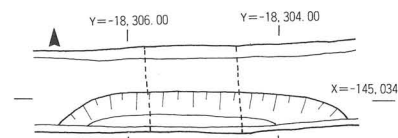


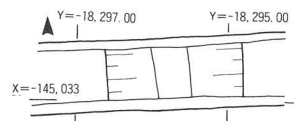
図22 第248-15次調査位置図 1:3000



①第3マンホール



②第2マンホール遺構図



③南北溝遺構図

図23 248-15次遺構図

II - 2 左京三条一坊十四坪の調査 第249次

共同住宅建設にともなう事前調査である。調査地は、国道368号線（大宮通り）と国道24号線の交叉点の南西に接した交通至便の地にあり、近年、とみに都市化が進んできたところである。奈良時代の条坊では、左京三条一坊十四坪の東北隅にあたる。また、かつて1967年12月から1968年4月にかけて、同坪の西辺に沿って南北約105mにわたり、第46次調査（調査面積2,290㎡）を実施し、築地塀とそれに開く門、園池のほか多数の掘立柱建物や総柱式高床倉庫を検出するなどの成果をあげている。

調査にあたり、建設予定地とほぼ重なるように、東西12.5m、南北46.5mの発掘区を設定したが、調査の過程で東辺と南端を一部拡張した。調査期間は1994年4月4日～5月23日、調査面積は拡張部をふくめて620㎡である。調査地の基本的な層序は、かつて工場であった時の盛土（約40～50cm）の下に旧水田耕土、床土と続き、現地表下約70～80cmで淡茶灰褐砂質土の遺構検出面となる。遺構検出面の標高は60.30～60.35mである。

1 遺構とその変遷

いずれも奈良時代と考えられる掘立柱塀8条、掘立柱建物12棟、土器埋納遺構1基、土坑2基などを検出した。遺構の重複関係、出土遺物等から4時期に分かれる。

I期（奈良時代初め） 発掘区中央東寄りの2間の南北塀SA5668と2間以上の東西塀SA5669のほかに顕著な遺構は認められない。

II期（奈良時代前半） 南北棟建物2棟（SB5631・SB5637）が南北に並び、敷地内を掘立柱塀で区画した様子がうかがえる。掘立柱建物SB5631は、梁間2間（8尺等間）、桁行7間（10尺等間）で、東に庇がつく。庇の出は9尺である。また、南3間分には棟通りに間仕切り用の柱穴がのこり、北側4間の「堂」的空間と南側3間の居室部分に区切られていた。居室部分の西8尺のところにある3間の南北塀SA5636は、目隠し塀もしくは居室部分の庇と考えられる。掘立柱建物SB5637は、西北の一部を検出したのみであるが、西庇をともなう。梁間、桁行ともに10尺で、庇の出は11尺。発掘区北寄りの掘立柱塀SA5641・SA5642は、鍵の手に曲る、あるいはT字形につながる塀で、東西4間分、南北2間分を検出した。柱間寸法は9尺であるが、東西塀SA5641の東から2間目が8尺と狭いことから、ここが通路になる可能性がある。

III期（奈良時代後半） II期の南北棟を東に建て替えたと考えられる配置をとる。掘立柱建物SB5630は、身舎が梁間2間（8尺等間）×桁行7間（10尺等間）で、庇の出は11尺。その南の掘立柱建物SB5638は、西北隅の一角のみを検出した。梁間、桁行とも11尺等間であり、柱掘形や柱抜き穴の規模・形状から礎石建物の可能性もある。掘立柱建物SB5632は東妻のみを検出したが、南北に庇をともなう。桁行の規模は不明であるが、梁間、庇の出ともに11尺。掘立柱建物SB5665は、発掘区西南で検出した2間の柱穴列。柱間寸法は9尺等間で、東西棟の東妻

と考えられる。SB5663は、東西1間（7尺）で、築地等の痕跡はのこっていないが、門の可能性はある。また、南北1間のSA5664（8尺）は目隠し塀か。掘立柱建物SB5640は、梁間3間以上（6.5尺等間）、桁行1間以上（9尺）の南北棟で、東に庇をともなう。庇の出は6.5尺。

IV期（奈良時代末） 掘立柱建物SB5634は梁間2間以上（6.5尺等間）、桁行7間以上（6尺等間）の南北棟。このほか小規模な掘立柱建物が点在する。また、発掘区北西隅に土坑SK5645が掘られる。

土器埋納遺構SX5670は、2棟の南北棟SB5630・5638（Ⅲ期）の中間にあたる。須恵器壺A（奈良時代前半）に須恵器皿Cを反転させて蓋としたもので、土器内外の土壌試料の分析によると、銅刀子（全長13.0cm、刃長2.9cm）・墨挺（現存長2.5cm）・筆管（現存長11.6cm）とともに胎盤を納めていた胞衣壺という結果が得られた。

2 遺物

総体的に出土遺物は少なく、とりわけ瓦類の出土量はわずかなので、瓦葺建物の存在は想定しがたい。土器は掘立柱建物SB5630の柱抜き穴から出土した土師器・硯、土坑SK5660出土の土師器・須恵器等がある。いずれも奈良時代後半のものである。土坑SK5645からは、埴片、炉壁、鉾滓等の铸造関係の遺物が出土した。そのほか、天徳2年（958）初鑄の乾元大宝8枚が出土している。

3 まとめ

十四坪は、第46次調査の成果から、園池をもつ1坪（以上）占地の宅地になる可能性が高いことが判明している。今回の調査において、4時期にわたる遺構変遷をたどるなかで、奈良時代中頃をはさむ2時期では、敷地内を塀等で区画し、建物を整然と配置した様相があきらかになった。坪の中心等、未調査部分がのこされてはいるが、この時期、坪の東北部は、主要施設が置かれた区画の一つであったと推定される。（小林謙一）

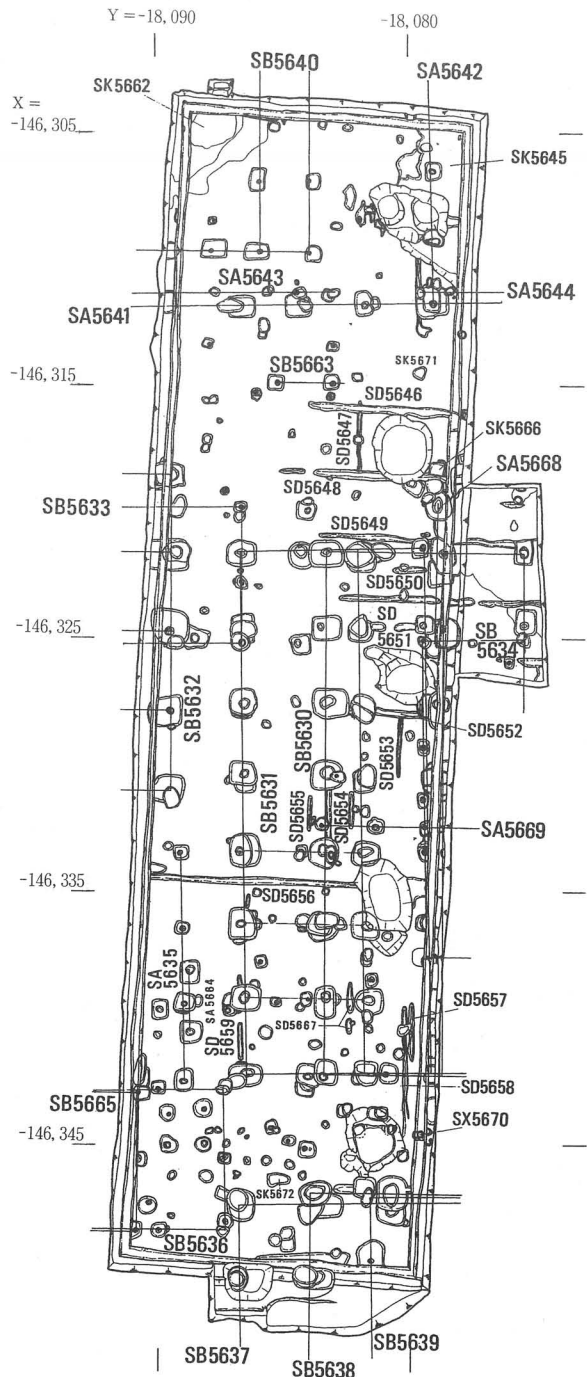


図24 第249次発掘調査遺構平面図 1:300

Ⅱ－3 左京七条一坊十六坪の調査 第252・253・254・255次

1 はじめに

この調査は、店舗新築の事前調査である。店舗の敷地は、東と南を佐保川、西を国道24号線（奈良バイパス）、北を県道京終停車場・薬師寺線で画された面積約31500㎡を占め、平城京左京七条一坊十六坪の大部分と六条一坊十三坪・六条二坊四坪・七条一坊十五坪・七条二坊一坪の一部分にあたる。このうち七条一坊十六坪を中心とする約14055㎡を、1994年5月から1995年4月まで5次にわけて調査した。第251次は東一坊大路上にトレンチを設け（225㎡・別項で報告する）、第252次は十六坪の東北部・東一坊大路西側溝を中心として六条大路・東一坊大路にトレンチをのぼし（約3900㎡）、第253次は十六坪の東南部・東一坊大路西側溝と七条条間北小路（約3730㎡）を、第254次は十六坪の西南部・七条条間北小路を中心に東一坊坊間東小路へトレンチをのぼし（約3700㎡）、第255次は十六坪の西北部（2500㎡）を調査した。その結果、十六坪のほぼ全容と十五坪の一部、十六坪周囲の条坊関係遺構が判明した。本稿は3月末までに得た所見に基づく中間報告であり、遺構番号は第251次を100番台、第252次を200番台、第253次を300番台、第254次を400番台、第255次を500番台とする仮番号である。

2 遺 構

調査区の基本層序は、上から水田耕土（約20cm）、床土（約40cm）、遺物包含層（黄灰色土、約20cm）が堆積し、遺物包含層を除去した面で奈良時代の遺構を検出した。この面は調査地各所で状況が異なり、奈良時代の遺物包含層が部分的にのこるほかは地山面である。地山面には平城京造営以前の河川が縦横に流れ、粘質土と砂質土が細かく入れ替わる複雑な様相を呈している。検出した奈良時代の遺構は、条坊関係遺構・十六坪内の遺構・十五坪内の遺構に大別でき、以下この順で記述する。十六坪内については、東北部・東南部・西南部・西北部で様相がきわだって異なることが判明したので、この順に分けて記述する。それぞれ第252・253・254・255の調査区にはほぼ対応するが、東南部は第252・253の両次にまたがる。（岩永省三）

A 条坊関係遺構

a 六条大路

第252次調査で8m分を検出した。今回南北両側溝を検出し、幅員がはじめて判明した。両側溝心々距離14.1～14.6mで、14.2mとすると40大尺に復原でき、既知の他の大路（約25m・70大尺前後）より狭い。大路路面は中央が高く両側溝側へ緩く傾斜する。

北側溝 幅4～6m、深さ0.8m。堆積層は大きく5層に区分できる。

南側溝 幅約4m、深さ0.7mで、東一坊大路西側溝との合流点では南北にひろがる。ほとんど埋没した時点で、幅0.7m、深さ0.3mに掘り直している。南側溝は過去に2地点（薬師寺南大門の南西側、大安寺の東側）で検出例があり、両地点を直線で結んで本調査地での位置を求

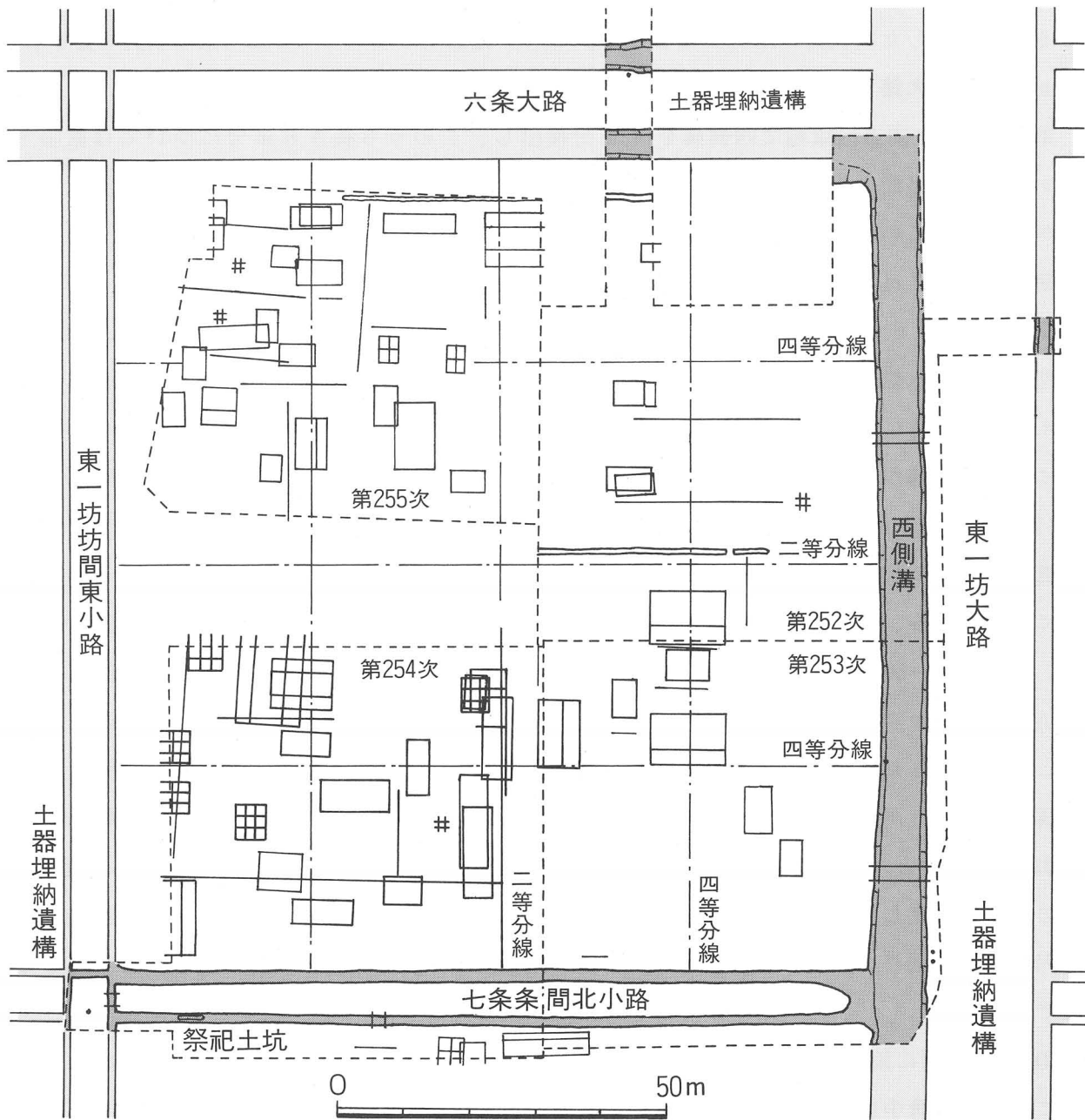


图25 左京七条一坊十六坪調査位置図 1:1000

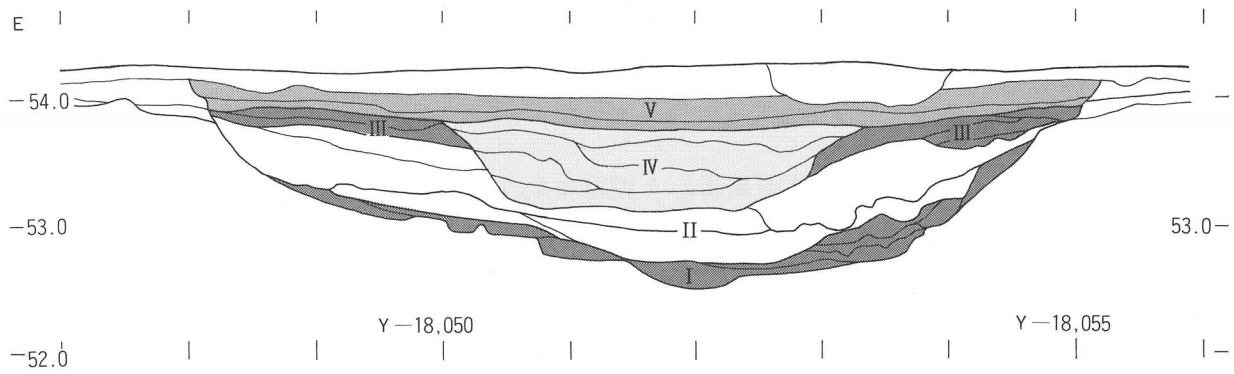


图26 東一坊大路西側溝断面図 1:60

めると、検出した南側溝の南約1mとなる。これが施工上のずれなのかは今後の検討を要する。

b 東一坊大路

第252・253次調査区東端で西側溝を142m分検出し、このうち長さ6m分については拡張トレンチを設け路面・東側溝も検出した。幅員は側溝心々で22.5mであるが、西側溝の流水で路肩が侵食されているため、正確な幅は確定しがたい。

東側溝 幅約3m、深さ0.3m。堆積層は大きく2層に区分できる。

西側溝 幅約7.6～8.3m、深さ約1.2～1.6mで、東側溝に比して規模が非常に大きく、単なる道路表面の排水処理以外に、東堀河や西一坊坊間大路西側溝と同様に運河としても機能したと考える。十六坪に面した2ヶ所に橋SX218・314（後述）が架かるが、七条条間北小路との交差点には橋の痕跡がない。流失した可能性がある。堆積層はⅠ（奈良前半）・Ⅱ（奈良後半）・Ⅲ（平安前半）・Ⅳ（平安後半）・Ⅴ（平安末）の大きく5層に区分できる。奈良時代後半に堆積が進み、平安時代初頭には幅は当初と変わらないものの、深さ約50cmになっていた。その後さらに堆積が進み、深さ30cmとなった時に、溝底の平安時代前期の堆積層上面から幅約2.5～3.4m、深さ約30～60cmの蛇行した溝を掘削する。平安時代後期に蛇行溝が埋没し、最終的に幅約8m、深さ20cmの浅い溝となり、両岸に入江状に入り込む部分が数カ所できる。溝を水田水路として利用したさいにできたと考える。また第252・253次調査区の境界線北側の場所に、杭と横木によるしがらみと土留め用の石からなる堰を設けている。溝の廃絶は平安時代末である。

SX216 西側溝と六条大路南側溝との合流部の約8m南の西側溝底に、曲物を埋設した遺構。溝の流水を浄化して用いるためのものであろう。溝底の厚さ80cmの堆積層上面から直径約70cmの円形掘形を掘り、曲物を2段据える。下段は直径35cm・高さ23cm、上段は直径50cm・高さ8cmである。

SX218 西側溝に架かる橋。十六坪を南北に二分する東西溝SD207の北約16m付近にある。西岸に杭3本、溝中央に柱穴3ヶ所、東岸に石組がある。

SX314 十六坪東南隅の北約14.5m付近の西側溝底西端にある南北杭列で、杭4本を斜めに打ち込む。溝の対岸に明瞭な遺構はないが、橋の構造材の一部であろう。

SX213 大路路面上で検出した奈良時代以前の竪穴住居跡。便宜的にここに記す。1辺約4mの方形で、底部がわずかにのこる。

c 七条条間北小路

約115m分を検出した。幅は南北両側溝心々距離で約7m（20大尺）。路面幅は5m前後であるが、東一坊大路西側溝に近づくにつれ北側溝南岸が南にひろがり路面を侵食する。道路心と六条大路心との距離は約136m（460小尺）である。平城京では1町375大尺（450小尺）四方で計画条坊を設定し、通常、条坊計画線上に道路心を置くが、ここでは六条大路心の南375大尺の位置に北側溝を置いている。藤原京では条坊計画線上に小路側溝を置き、しかも坪によって

両側溝のうちどちらを条坊計画線上に置くか一定しない方式も存在した可能性が説かれている。平城京でも同じ方式を採った場所があるかどうか、今後の検討を要する。

北側溝 幅1.8～2.5mで、北岸（十六坪側）は直線状を呈するが、南岸は所々南へ広がり路肩を侵食する。深さは35～60cmで、東一坊大路西側溝に近づくにつれ深くなる。堆積土は大きく3層に区分でき、少量の土器を含む。十六坪の西南隅から東へ28～41mの間で溝底が深くなる。十六坪の西端近くの底に長さ5.2m、幅1.4m、深さ40cmの土坑があり、土器片がまとまって出土した。東一坊坊間東小路を横切ってさらに西に続き、交差点では幅1.4m、深さ20cmである。

南側溝 幅1.4～2m、深さ25～40cmで、北側溝と異なり両岸ともに直線状を呈する。堆積土は大きく2層に区分でき、下層から小土器片が多数出土した。十五坪西北隅から東へ40mのところ橋脚2本の橋SX447（幅1.8m）が架かる。SX447の東28mの所では、小路路肩が南側溝側に幅3m・奥行40cmほど張り出しており、ここも出入口であろう。十五坪の西端近くの底に祭祀土坑SX444がある。東一坊坊間東小路東側溝のところまで止まり西にのびない。

d 東一坊坊間東小路

10m分を検出した。西側溝西肩は調査区外である。幅は東西両側溝心々距離で約7mと推定する。道路心は東一坊大路西側溝心と123.8m離れる。試みに東一坊大路幅を22.5mとして、東一坊大路と東一坊坊間東小路の心々距離を求めると135.05m（380大尺・456小尺）となり、計画条坊の1町（375大尺・450小尺）を越える。ただし、当調査区内では東一坊大路西側溝心の位置、東一坊大路幅ともに不確かであり、参考値にとどまる。七条条間北小路との交差点南寄りの路面上に土器埋納遺構SX446がある。

東側溝 七条条間北小路との交差点では幅1.3～1.7m、深さ25cmと狭く、その南北両側では、幅2.4～2.9m、深さ25～35cmである。七条条間北小路心のやや南に、桁行3間、梁間1間（6.5尺）、橋脚4本の橋SX445が架かる。

西側溝 東肩のみを検出した。深さ35cmで、幅は1.4mと推定する。

e 条坊遺構にともなう埋葬ないし祭祀遺構

十六坪を囲む条坊遺構上で4ヶ所の土器埋納遺構、1ヶ所の祭祀土坑を検出した。前者は甕棺墓の可能性もあるが、現時点では内容物を特定できず、暫定的に土器埋納遺構と呼んでおく。

SX215 六条大路路面上の土器埋納遺構で、北側溝側の路肩近くにある。奈良時代後半の甕2点を合口で土坑内に横たえ、長軸を側溝と直交方向に埋めたもの。上半が削平され、甕の下半1/2がこのころ。甕内の土壌は脂肪酸分析中である。掘形は長楕円形で長95cm、幅50cm、現存深さ20cm。

SX316・317 東一坊大路路面上の土器埋納遺構で、七条条間北小路との交差点の北に接した路肩近くにある。2基とも奈良時代後半の甕2点を組み合わせて土坑内に横たえ、長軸を西側溝と並行に埋納したもので、掘形どうしが重複し、SX317の方が新しい。埋納坑上半が削平され、

甕は下側 1 / 2 ~ 1 / 3 がのこる。甕内の土壌は脂肪酸分析中である。SX316の掘形は長楕円形で長1.3m、幅60cm、現存深さ20cm。甕2点を合口で置く。SX317の掘形は楕円形で、長1m、幅60cm、現存深さ20cm。甕は合口ではなく、北側の底を打ち欠き南側の口にはめ込んでいる。

SX446 七条条間北小路と東一坊坊間東小路の交差点路面上の土器埋納遺構で、交差点の南端中央にある。土坑内に奈良時代後半の甕1点を横たえ長軸を南北方向に埋納したもの。口縁と掘形のあいだに隙間があり、有機質の蓋が存在した可能性がある。上半が削平され、甕の下半 1 / 2 がのこる。掘形は長楕円形で長47cm、幅30cm、現存深さ11cm。

SX444 七条条間北小路南側溝底の祭祀土坑。長さ6.4m、深さ50cmである。西端から（以下同様）2m付近に馬の上顎2点・下顎1点・脚部などの骨が集中し、3.2mに土師器甕1点、4m付近に人面墨書土器1点（石で割った可能性あり）・馬上顎1点、4.8m付近に須恵器壺（漆容器片あり）・須恵器杯などが埋められていた。馬の顎骨は歯のみが残存する。出土土器の年代は奈良時代前半（平城宮土器Ⅱ）である。

B 十六坪内の遺構

坪内の南北を二分する位置に東西溝SD207、東西を二分する位置に南北堀SA402がある。SD207が坪の西半部におよぶか調査区外であるため不明で、SA402は坪の北半にはおよばないが、便宜的にSD207以北の東半を「東北部」、西半を「西北部」、SD207以南でSA402以東を「東南部」、SA402以西でSD207西延長部以南を「西南部」と呼ぶ。

a 東北部の様相

十六坪東北部は、東西溝SD207を南限とする。西北部との間には溝・堀などの区画施設を検出していないが、第255次調査区東北隅で検出し十六坪の北辺中央に位置する大型建物SB506の南側には、奈良時代を通じて遺構が存在しない東西18m、南北43mの空間があることから、便宜的にSB506より東を東北部と呼ぶ。検出した遺構は、掘立柱棟建物5棟、掘立柱堀2条、溝3条、井戸1基、土坑1基である。建物のほぼ同位置での建て替えが1回あるものの、敷地の西半に東西棟建物3棟がほぼ南北に並び、東半に広い空地があるのが基本的遺構配置である。敷地北辺に27×16mと10×16mの未掘地があり、十六坪西北部の状況からすると、この未掘部分に建物がある可能性は否定できないが、推測の域を出ない。いずれにせよ、十六坪東南部・西南部・西北部において4時期の遺構変遷があるのとは対照的である。この配置が奈良時代を通じて存続したのか、まったく建物のない空地の時期もあったのか、東南部・西南部・西北部の4時期との対応関係とともに、今後の検討を要す。以下、東北部の外周を画す遺構、内部の遺構の順で記述する。

SD209 十六坪の四周のうち、六条大路に面した北面と東一坊大路に面した東面には築地堀があったと考えられるが、削平され築地本体は遺存しない。SD209は、六条大路南側溝南肩の南5.2mに心がある東西溝で、北面築地の南雨落溝であろう。幅70cm～1.1m、深さ40cmで、堆積

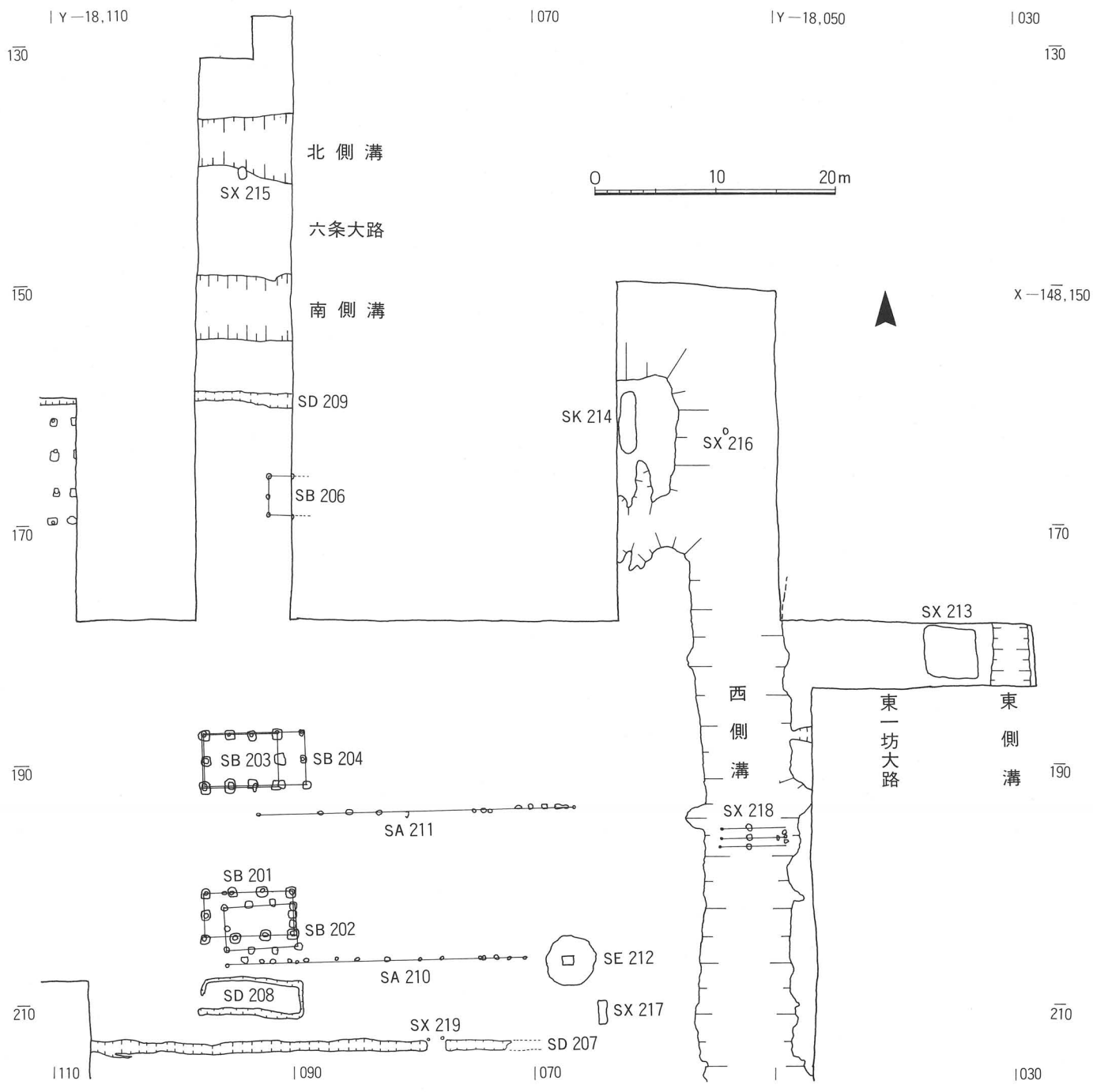
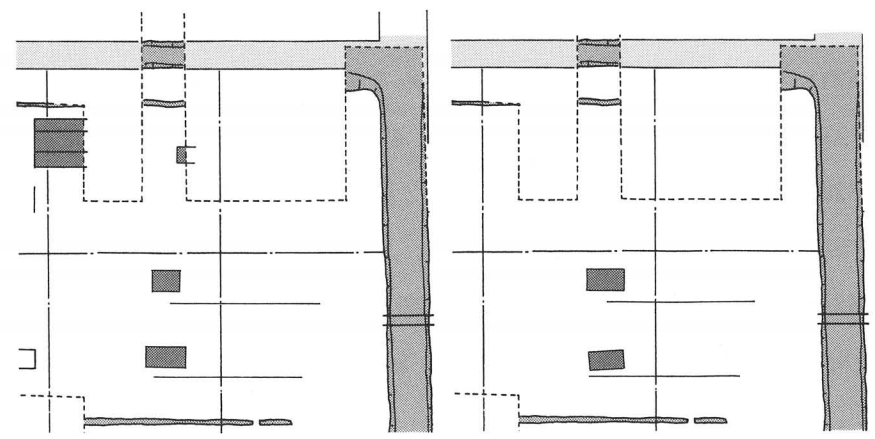


図27 左京七条一坊十六坪東北部
調査遺構図 (1:500)
および遺構変遷図
(左:前半、右:後半)



土は2層あり、黄褐色土からなる上層は築地の崩壊土であろう。瓦片多数と風字硯が出土した。築地の北側には雨落溝を設けず、直接に大路南側溝へ排水したと考える。十六坪東北隅部ではSD209は検出できなかったもので、未掘部分で途切れているのであろう。十六坪西北部で西延長部を検出した。東面築地塀の西雨落溝はみつかっていない。

SD207 十六坪の南北を二分する東西溝で、幅1m、深さ20cm。六条大路と七条条間北小路の心々間距離をちょうど二分する位置にある。六条大路南側溝南肩と七条条間北小路北側溝北肩との中点、すなわち十六坪の敷地正味の中点からは約2m北へずれるから、この溝の設定は条坊計画時の奈良時代初頭に遡る可能性が大である。十六坪東南部の正殿SB220・221・305の東妻に対応する位置で1.4m途切れ、陸橋部北側に小柱穴2個(SX219)が1.2m間隔で並ぶ。簡単な門をとまなう通用口であろう。SB305はA期、220はC期、221はD期であるから(後述)、奈良時代を通じて通用口であった。SD207はSX219の東5.5m以東では削平され遺存しない。

SB201 掘立柱東西棟建物で、桁行3間(8尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。南側柱がSD207と8.9m(30尺)離れる。

SB202 SB201を東南にずらして建て替えた掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。

SA210 SB201の南2.1m(7尺)にある掘立柱東西塀で、SB201の西から二番目の柱付近から東へ24.7mのび、SE212の手前で止まる。柱間は不揃いである。

SD208 SA210とSD207の間にあり、東西8.6m、南北3.2mの範囲を口の字状にかこむ溝。東西の端をSB201の妻にそろえる。SB201に付属する菜園の区画溝であろうか。幅15~50cm、深さ3cm程度で、一部は削平されのこっていない。

SE212 SD207の北7mにある井戸。直径約4m、深さ1.6mの円形摺鉢状掘形内に、一辺84cmの縦板組横棧どめ方形井戸枠を据える。

SB203 掘立柱東西棟建物で、桁行3間(7尺×3)、梁間2間(7尺×2)である。SB201と西妻をそろえ、南側柱がSB201北側柱と8.8m(30尺)離れる。

SB204 SB203を西妻の位置を変えずに東へ1間のばして建て替えた掘立柱東西棟建物で、桁行4間(7尺×3)、梁間2間(7尺×2)である。

SA211 SB203の南2.4m(8尺)にある掘立柱東西塀で、SB203の東から2番目の柱付近から東へ25.4mのびる。柱間は不揃いである。

SB206 掘立柱東西棟建物で、桁行2間(6尺)以上、梁間2間(6尺×2)である。南側柱がSB203北側柱と18m(60尺)離れ、北側柱がSD209南肩と5.8m(20尺)離れる。

SK214 十六坪東北隅にある南北に細長い土坑。北面築地南側溝SD209の東延長上に位置する。長5.1m×幅1.5m×深さ80cmで、漆を入れた奈良時代前半の須恵器や漆器片などが多数出土した。

(内田和伸)

b 東南部の様相

十六坪東南部は、東西溝SD207を北限、南北塀SA402を西限とする。検出した遺構は掘立柱建物8棟・掘立柱塀5条・土坑6基などで、各建物間には敷地を区画する明瞭な施設はなく、奈良時代を通じて東南部を一体として使用したと考える。遺構は方位の振れ、重複関係、位置関係に基づきA～Dの4期に区分でき、A・B期が奈良時代前半、C・D期が奈良時代後半である。SA402については「西南部の様相」の項で記す。

A期 敷地のほぼ中央に当坪内では規模の大きい南庇付東西棟建物SB305（正殿）、その西側に東庇付南北棟建物SB308（脇殿）、東南側に南北棟建物SB311を置く。この3遺構の北・南側には広い空地をとる。

SB305 掘立柱東西棟建物で、桁行5間（8尺×5）、梁間2間（9尺×2）に南庇（出9.5尺）がつく。桁行の中心が坪の東西4等分線上にあり、南庇は坪の南北4等分線とほぼそろろう。身舎西妻中央柱と庇西端柱の柱根がのこる。

SB308 SB305の西にある掘立柱南北棟建物で、桁行5間（7尺×5）、梁間2間（6.5尺×2）に東庇（出9.5尺）がつく。南妻がSB306の南庇と筋をそろえ、坪の南北4等分線上にある。東庇はSB305の西妻と10.6m（36尺）離れる。

SB311 SB305の東南にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（8尺×3）、梁間2間（8尺×2）であるが、南妻面では、4.5尺+7尺+4.5尺の3間に割っており、中央に戸口を設けたと考える。北妻がSB305南庇（坪の南北2等分線）と3m（10尺）離れ、西側柱がSB305東妻と2.9m（10尺）離れる。

SX323 七条条間北小路北側溝の北側に溝と並行して並ぶ2個の柱穴。小路への出入口であろう。柱間3m（10尺）で、溝肩から1.2m離れる。B期以降も存続すると考える。

B期 A期のSB305・308は存続する。SB305の北側に東西棟建物SB302（後殿）を建て、SB311を廃し東南にずらして南北棟建物SB312に建て替える。

SB302 SB305の北にある掘立柱東西棟建物で、桁行3間（7尺×3）、梁間2間（7尺×2）である。SB305と同様に桁行の中心が坪の東西4等分線上にある。南側柱がSB305北側柱と5.9m（20尺）離れる。

SB312 SB305の東南にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（6尺×3）、梁間2間（6尺×2）である。北妻がSB305南庇（坪の南北2等分線）と11.5m（39尺）離れ、東側柱がSB305東妻と11.5m（39尺）離れる。

C期 様相が大きく変わる。B期の建物をすべて廃し、敷地の中央北端近くに南庇付東西棟建物SB220、その南側に目隠し塀SA303を置き、それ以南には広大な空間をとる。坪の東西二等分線上の南北棟建物SB404（「西南部の様相」の項で記述）が脇殿にあたる。

SB220 掘立柱東西棟建物で、桁行5間（9尺+8尺×3+9尺）、梁間2間（8.5尺×2）に

庇（出10尺）がつく。桁行の中心が坪の東西4等分線上にあり、北側柱がSD207南肩の南6m（20尺）にある。庇西端の柱の柱根がのこる。

SA303 SB220の南にある掘立柱東西塀で4間分（柱間6尺）を検出した。SB220の南庇と5.9m（20尺）離れる。

D期 SB220を廃し同位置で東西棟建物SB221に建て替え、目隠し塀として、南側に東西塀SA301、東側に南北塀SA222を置く。C期の脇殿SB404を廃し、SB221の西南側に南北棟建物SB306を建て、その南に目隠し塀SA307を置く。

SB221 掘立柱東西棟建物で、SB220を同位置・同規模で南庇を廃して建て替えたもの。

SA301 SB221の南にある掘立柱東西塀で5間分（柱間6尺）を検出した。SB221の南側柱と3.6m（12尺）離れる。

SA222 SB221の東にある掘立柱南北塀で7間ある。柱間は不揃いで70cm～1.7m。SB221の東妻と3.3m（11尺）離れ、SD207の南側から発しSB221の南側柱筋にいたる。

SB306 SB221の西南にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（7尺×3）、梁間2間（6.5尺×2）である。南妻がSB221の南側柱と14.8m（50尺）離れ、東側柱がSB221の桁行中心線と7.4m（25尺）離れる。

SA307 SB306の南にある掘立柱東西塀で4間（柱間3尺）あり、両端の柱穴が他よりかなり大きい。SB306の南妻と2.7m（9尺）離れる。

SA406 SB306の西方11.9m（40尺）にある掘立柱南北塀で、2間（柱間7尺）分を第254次調査で検出した。さらに北にのびるか不明である。その西にある掘立柱東西棟建物SB415東妻とは4.5m（15尺）離れる。

SX315 東一坊大路西側溝の西岸にある土器埋納遺構で、十六坪の南北四等分線上にある。西側溝の奈良時代前半の堆積層を掘り込んで甕2点を合口で横たえ、長軸を西側溝と並行に埋めたもの。上半が削平され、甕の下半1/2がのこる。

その他の遺構 現時点で時期未確定の遺構をまとめて記述する。奈良時代以外の若干の遺構も便宜的にここで記述する。SB304はSB306の西北にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（6尺×3）、梁間2間（8尺+6尺）、掘形が小さい。SD309はSB308の南の浅い東西溝で、東で南に振れ西端が南へ直角に折れ曲がる。SD310はSD309の東端近くからSD309とずれて始まる浅い東西溝で、東で南に振れ東端が南に折れる。SD313は東一坊大路西側溝のすぐ西で検出した奈良時代以前の溝で東で北に大きく振れる。SK318・319・320・321・322は敷地の東南部に散在する方形の土坑で、一辺1.5～2.3m、深さ約80cm～1.6m。SK325はSB308の北に接した円形の土坑で、径2m、深さ70cm。これらの土坑は井戸枠をともし、井戸を試掘したが何らかの事情で途中放棄したものとする。（長尾 充）

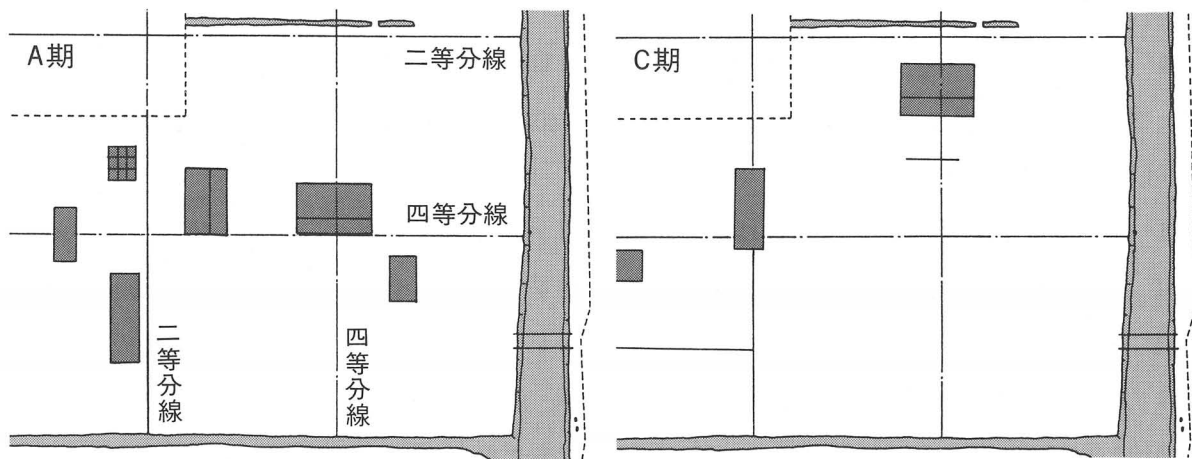
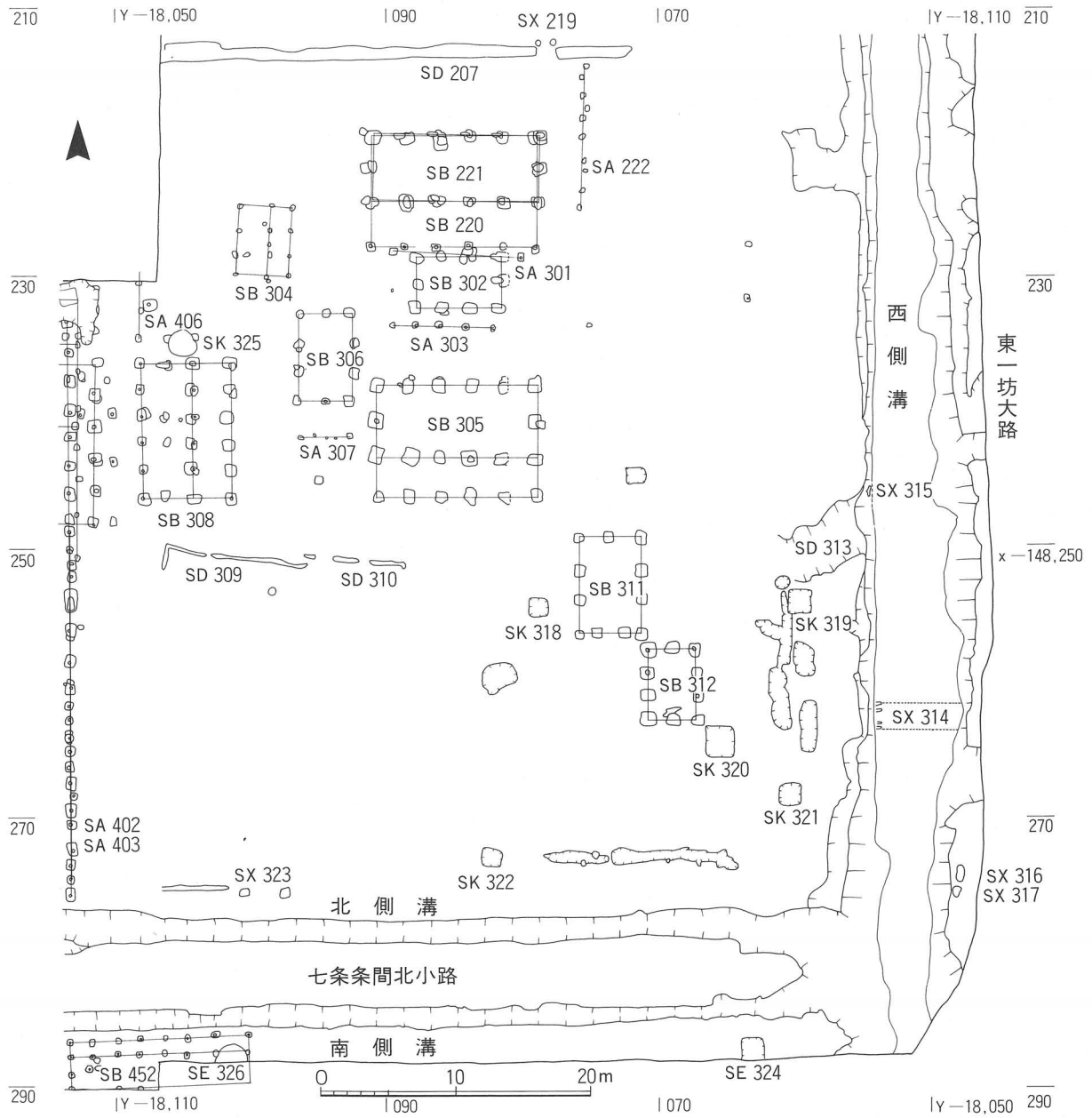


図28 左京七条一坊十六坪東南部調査遺構平面図 (1:500)・遺構変遷図 (左: A期、右: C期)

c 西南部の様相

十六坪西南部は、南北塀SA402・403を東限とし、北限は調査区外であるが、東西溝SD207の西延長部と想定する。掘立柱建物20棟・塀8条・井戸1基・溝1条・土坑多数があり、東北部・東南部に比して数が多い。重複関係、方位の振れ、出土遺物などに基づき、A～Dの4期に区分できる。A・B期が奈良時代前半、C・D期が奈良時代後半である。

A期 遺構の方位が北でやや西偏する。十六坪の中央に南北塀SA402があり、坪の南半を東西に二分する。以後、奈良時代を通じて坪の東半は遺構が疎、西半は遺構が密である。SA402に沿って南北棟建物SB407・413、その西の南北四等分線上にSB418、西に離れたところに総柱南北棟建物SB428がある。SB428の周囲には空地がひろがる。

SA402 掘立柱南北塀で、20間分（柱間7尺）を検出しさらに北にのびる。七条条間北小路北側溝の北1mから始まっており、十六坪の南辺には築地がなかったようである。東一坊大路西側溝西肩と東一坊坊間東小路東肩との中点、すなわち十六坪の敷地正味の中央に位置する。

SB407 SA402の西側の掘立柱南北棟建物で、桁行6間（8尺×2）、梁間2間（7.5尺×2）である。SA402と1.3m（4.5尺）離れ、南妻は北側溝北肩と10.2m（35尺）離れる。

SB413 SB407北方にある総柱の掘立柱南北棟建物で、桁行3間（5.5尺×3）、梁間3間（5尺×3）である。SB407と両側柱筋をそろえ、南妻がSB407北妻と14.5m（49尺）離れる。

SB418 SB413の西南にある掘立柱南北棟建物で、桁行5間（5.5尺×5）、梁間2間（6尺×2）である。桁行中心線が坪の南北四等分線上にあり、西側柱がSA402と14.7m（50尺）離れる。

SB528 総柱の掘立柱南北棟建物で、桁行3間（6尺×3）、梁間3間（5尺×3）である。北妻がSB507北妻と筋をそろえ、東側柱がSB407西側柱と29.8m（100尺）離れる。

B期 A期の建物配置に近い。遺構の方位が北で東偏するものが多い。SA402は存続する。SA402沿いに南北棟建物SB409・414がある。SB414の西に空地をとり、それに面して東妻柱筋をそろえる2棟の東西棟建物SB424・425が並ぶ。両者の西側に南北溝SD429がある。SB409の西側、SB424の南側には空地がひろがり、その中央にSB423がある。

SB409 SA402の西側の掘立柱南北棟建物で、桁行6間（8尺×2）、梁間2間（7.5尺×2）である。SB407を同規模で北へ2間ずらしたもの。SA402と1.9m（6.5尺）離れ、南妻は北側溝北肩と14.9m（50尺）離れる。

SB414 SB409北方にある掘立柱南北棟建物で、桁行2間（8尺×2）、梁間2間（5.5尺×2）である。SB413の位置を踏襲する。SB409と棟通りをそろえ、北妻がSB409北妻と14.9m（50尺）離れる。

SB424 掘立柱東西棟建物で、桁行5間（5尺×5）、梁間2間（6.5尺×2）である。桁行中心線がSA402と29.5m（100尺）離れ、北側柱が北側溝北肩と35.9m（121尺）離れる。

SB425 SB424の北の掘立柱東西棟建物で、桁行5間（6.5尺×5）、梁間2間（6尺×2）に両

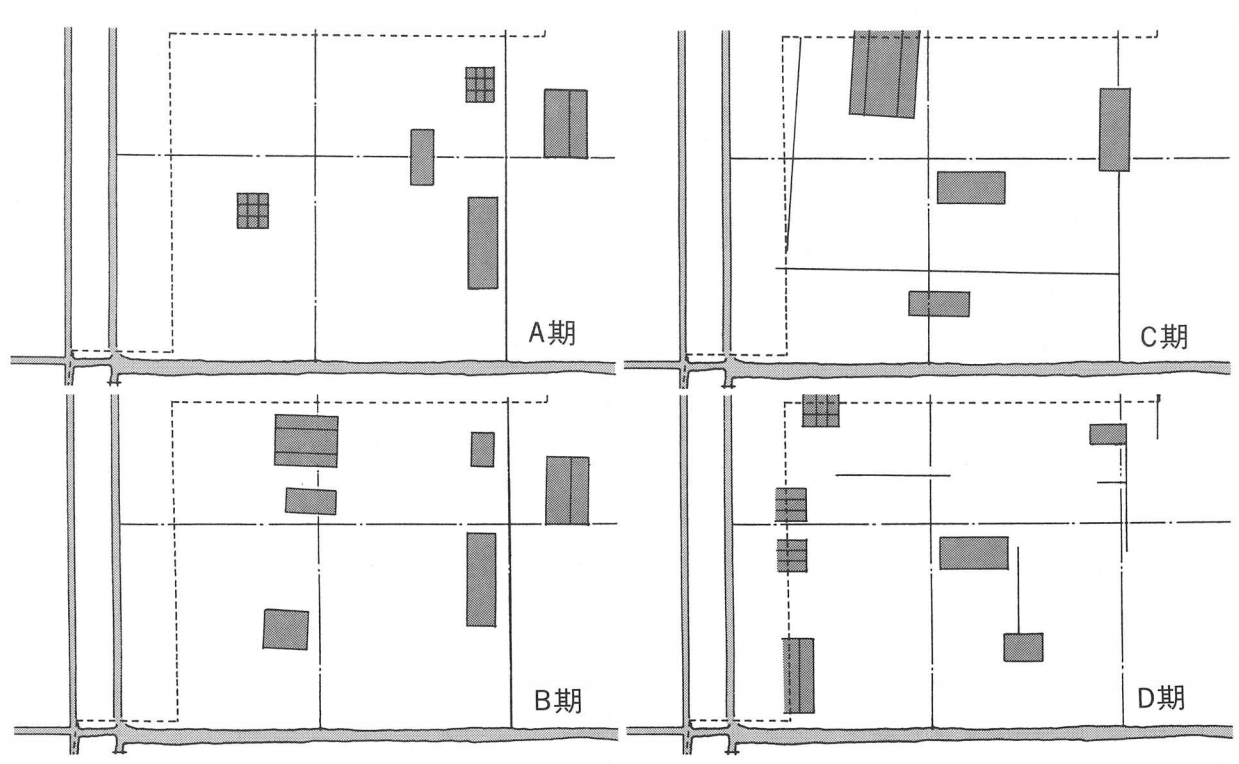
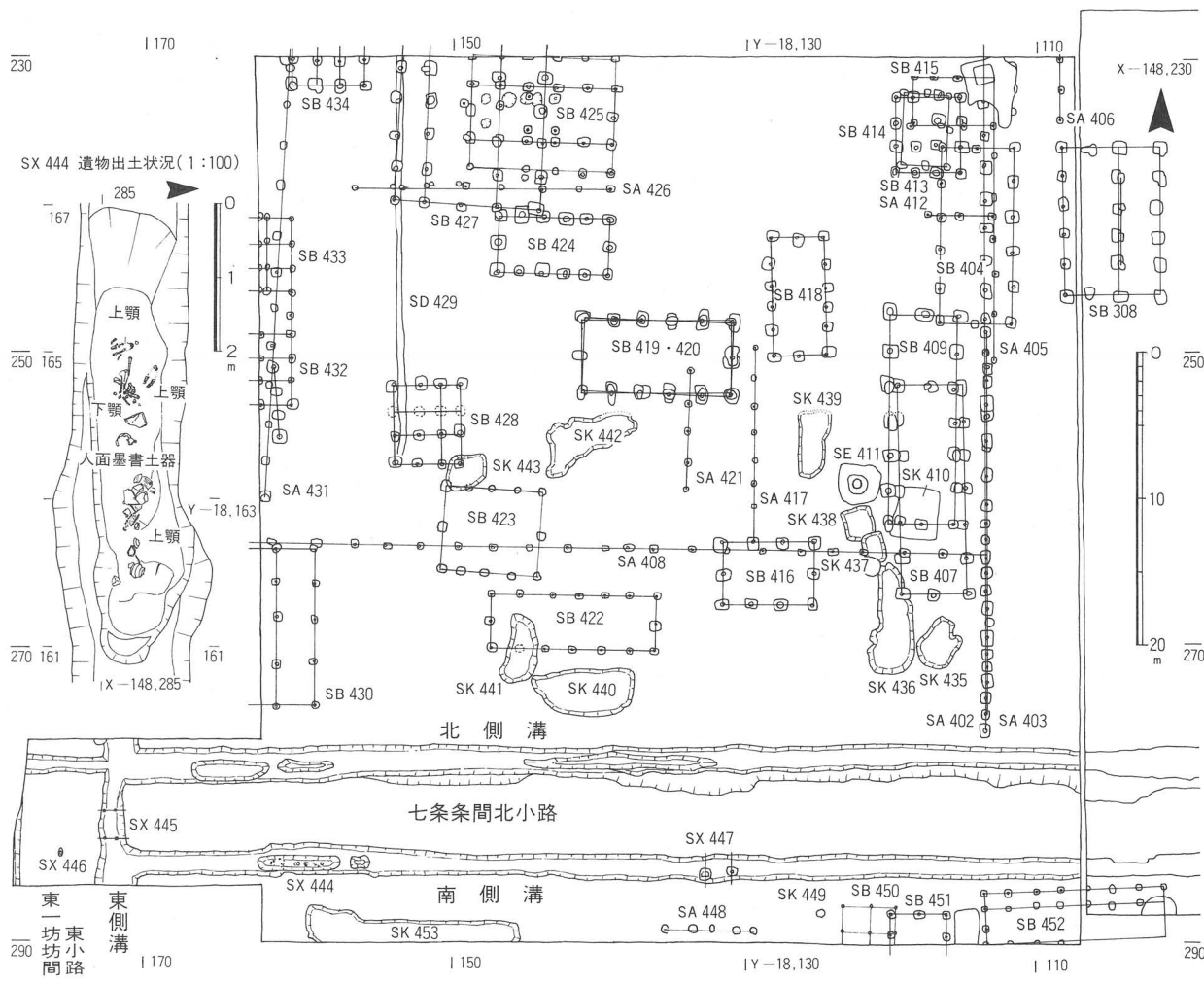


図29 左京七条一坊十六坪西南部調査遺構図 (1:500)・遺構変遷図

庇（出7尺）がつく。SB424と東妻をそろえ、3m（10尺）の間隔をとる。身舎内の西妻寄り
と北側寄りに不整円形（径70cm～1m）で浅い土坑が5基ある。大甕を据えた穴であろう。ま
た身舎中央間の四隅に深い柱穴があり、建物内に何らかの施設を設けた可能性がある。

SA421 SB424の東南の掘立柱南北塀で、3間（柱間7尺）ある。SB424東妻柱筋と5.8m（20尺）
離れる。

SB423 SB424の南方にある掘立柱東西棟建物で、棟通りに床束があり、桁行4間（5.5尺×4）、
梁間2間（9.5尺×2）である。東妻がSB409西側柱筋と23.7m（80尺）離れるとともにSB424
の桁行中心線と筋をそろえ、北側柱がSB424南側柱と14.8m（50尺）離れる。

SD429 SB424・SA425西側の南北溝で、27m分を検出しさらに南にのびると考える。幅60cm・
深さ15cmで、東一坊坊間東小路東側溝東肩と17.7m（60尺）離れる。

C期 大きく様相が変化する。遺構の方位が北で東偏するものが多い。B期までのSA402の
位置を踏襲した南北塀SA403があり、それに接して南北棟建物SB404が建つ。SA403から発し調
査区西端にいたる東西塀SA408ができ、その南の区画には東西棟建物SB422がある。SA408の北
側の区画は、その西辺を南北塀SA431で画し、内部にSB419と規模の大きいSB427がある。SB404・
419・427にかこまれた内側は空地である。

SA403 掘立柱南北塀（柱間7尺）で、B期までのSA402の位置を踏襲するが、半間北へずら
し南から12間分しかない。七条条間北小路北側溝の北2.3m（8尺）から始まっており、そこ
を通路としたのであろうか。

SB404 SA403の北端に接した掘立柱南北棟建物で、桁行5間（8尺×5）、梁間2間（8.5尺×
2）である。坪の東南部の正殿SB220に対する脇殿的建物であって、棟通りがSB220桁行中心
線と28.7m（97尺）離れており、100尺離すよう計画したのであろう。また桁行中心線がSB220
南庇と14.8m（50尺）離れる。

SA408 SA403の南から6本目の柱から西にのびる掘立柱東西塀（柱間8.5尺）で、19間分を検
出しさらに西にのびると考える。

SB422 SA408の南にある掘立柱東西棟建物で、桁行5間（6尺×5）、梁間2間（6尺×2）
である。北側柱がSA408と3.2m（11尺）離れ、東妻をSB419の桁行中心線にそろえる。

SB419 SA408北側の掘立柱東西棟建物で、桁行5間（7尺×5）、梁間2間（8.5尺×2）であ
る。北側柱はSB404の南妻と筋をそろえ、桁行中心線がSA403と22.3m（75尺）離れる。

SB427 SB519の西北にある掘立柱南北棟建物で、桁行5間以上（7.5尺×5以上）、梁間2間
（8尺×2）に両庇（出は東10尺・西7尺）がつく。身舎南から3間目に間仕切りがある。北
で東偏する振れがきついが、東庇がSB404棟通りと29.7m（100尺）離れ、桁行5間とすると、
桁行中心線がSB404北妻と筋をそろえるように計画したようだ。

SA431 SB427の西にある掘立柱南北塀（柱間9尺）で、11間分を検出しさらに北にのびると考

える。SA408の北3m（10尺）から発し、SB427の西庇と7.4m（25尺）離れる。

D期 C期のSB419を同位置で建て替えたSB420を中心として、方位の振れがない遺構群を整然と配置する。坪の東西二等分線上のSA403を廃し、小建物SB415から南にのびる南北塀SA405となる。SB420の周囲には、北にSA426、東南にSB416・SA417があるのみで、建物が疎になるのに対し、東一坊坊間東小路に面した敷地西辺にSB430・432・433・434が並び、敷地の利用が街路寄りに変化したと考えられる。

SB420 SB419を同位置で建て替えた掘立柱東西棟建物で、規模は変わらないが、SB419がわずかに北で東偏するのに対し、SB420は振れがない。

SB416 SB420の東南の掘立柱東西棟建物で、桁行3間（7尺×3）、梁間2間（7尺×2）である。SB420の棟通りの14.6m（50尺）南を棟通りとし、西妻がSB420の桁行中心線と4.5m（15尺）離れる。

SA417 SB416の北側柱西から2本目から北へのびる掘立柱南北塀（柱間6尺前後）で、7間ある。SB420の東妻と1.6m（5.5尺）離れる。

SA405 SB420の東妻から17.8m（60尺）東にある掘立柱南北塀（柱間9尺）で、6間あり小規模な東西棟建物SB415の東妻にとりつく。

SB415 掘立柱東西棟建物で、桁行3間（6尺×3）、梁間2間（5.5尺×2）である。棟通りがSB420の北側柱筋と14.9m（50尺）離れる。「東南部の様相」の項に記したSA406は、SB415の東妻と4.5m（15尺）離れる。

SA412 SB415の南側柱の6m（20尺）にある掘立柱東西塀で、2間（柱間7.5尺）ある。SA405の柱と柱の間から出る。

SB430 SB420の西南方にある総柱ないし東庇付きと推定できる掘立柱南北棟建物で、桁行5間（7尺×5）、梁間2間以上（9尺）である。南妻は七条条間北小路北側溝と3m（10尺）離れ、桁行中心線はSB420の南側柱と15.1m（51尺）離れる。

SB432・433 SB430の北にあり、SB420の東妻から30m（101尺）の位置を東側柱とする総柱の掘立柱南北棟建物。桁行3間（5.5尺×3）、梁間2間（7尺×2）である。両者は柱筋をそろえ、2.9m（10尺）離れる。SB432の北妻はSB430の北妻と14.6m（49尺）離れる。

SB434 SB433の北にある掘立柱建物で、総柱ないし南庇付と推定できる。柱間は東西・南北とも5.5尺。西端はSB433の東側柱と筋をそろえ、南端はSB433北妻と8.9m（30尺）離れる。

SA426 SB420・434の間にある掘立柱東西塀（柱間8.5尺）で7間あり、SB420北側柱と8.8m（30尺）離れる。

その他の遺構 現時点で時期未確定の遺構をまとめて記述する。

SE411 SB407・409の西にある井戸。掘形は最大径3m・深さ2mの不整円形である。直径80cm・長さ183cmのヒノキの大木の内側をくり抜いた材を井戸枠とする。枠上端部の裏込めには

須恵器片・磚をもちいる。井戸の廃絶は奈良時代末であり、埋土から多数の土器類が出土した。
SK410 SB407・409より古い方形大土坑。東西3.1m・南北3.6m・深さ105cm。井戸枠をとまわず、井戸を試掘したが、何らかの事情で途中放棄したものとする。

SB420より南側には土器片を多く出土する不整形で浅い大型土坑が多数ある。遺構の切合い関係から、SK436はA期以前、SK437・438はB期以前、SK441はD期以後、SK443はC期以後である。SK440・441の埋土には炭化物が多くふくまれ、火災後の廃棄物を捨てた可能性がある。
(岩永省三)

d 西北部の様相

十六坪西北部は、東西溝SD207の西延長部を南限とし、東北部との間には溝・塀などの区画施設を検出していないが、第255次調査区東北隅で検出した十六坪の北辺中央に位置する大型建物SB506を、便宜的に東限とする。検出した遺構は掘立柱建物21棟、掘立柱塀5条、井戸4基、溝4条、土坑4基で、方位の振れ、重複関係、位置関係に基づきA～Dの4期に区分でき、A・B期が奈良時代前半、C・D期が奈良時代後半である。奈良時代を通じて比較的小規模な建物を雑然と配置している。塀を配して空間を仕切る場合でも、塀の間に間隙を広くとり、截然と空間を区画することがない形跡から、西北部全体を一体として使用したと推定する。

十六坪北面築地南側溝SD209は、西北部でも検出したが、調査区中央部で途切れる。幅1.1m、深さ40cmで、堆積土は東北部と同様に上下2層ある。溝の底面は凹凸があり、下層は断続的に存在する。上層は築地崩壊土であろう。

A期 十六坪北面築地南側溝SD209のすぐ南に、SB506・509・512を置き、南に若干控えてSB501・505・503・517・SA525を置く。いずれの建物もSB506の妻柱筋・側柱筋から、10・50・80尺といった距離をとって設定されている。

SB506 十六坪西北部の東北隅にある掘立柱東西棟建物で、桁行5間以上(6.5尺×5以上)、梁間2間(5.5尺×2)に南北両庇(出8尺)がつく。A・B期を通じ十六坪北半部の中心的建物である。桁行を5間と仮定すると、その中心が東一坊大路と東一坊坊間東小路の心々間距離をほぼ二分する位置にある。東一坊大路西側溝西肩と東一坊坊間東小路東肩との中点、すなわち十六坪の敷地正味の中心からは約3.6m東へずれるから、この建物の設定は条坊計画時の奈良時代初頭に遡る可能性が大である。SB506の北側柱はSD209心の南4.4m(15尺)にあり、SB509・512の南側柱はそれと筋をそろえる。

SB509 掘立柱東西棟建物で、桁行4間(5.5尺×4)、梁間2間(6尺×2)である。西妻がSB506西妻と29.5m(100尺)離れる。

SB512 掘立柱東西棟建物で、桁行2間以上(6尺×2以上)、梁間2間(6尺×2)である。桁行3間と仮定すると、その西妻はSB506西妻と44.5m(150尺)離れる。

SB501 掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。東妻を

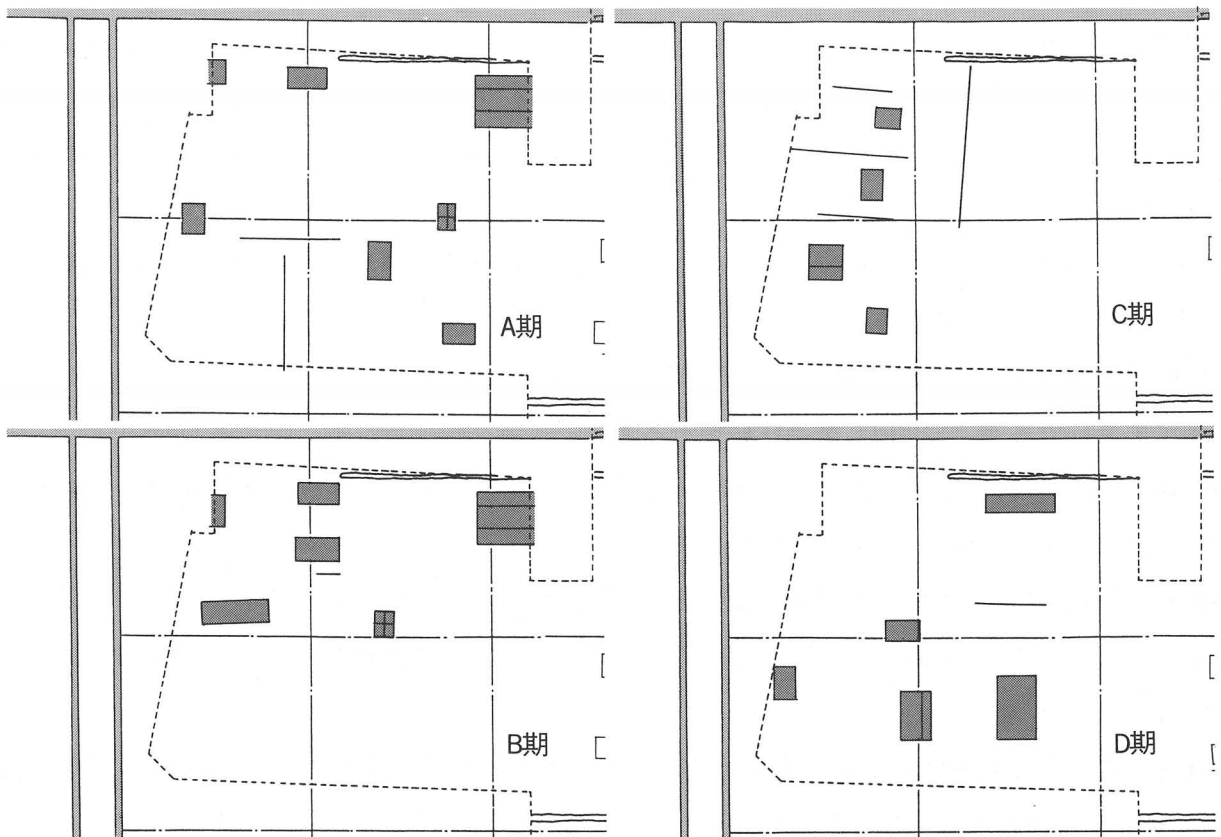
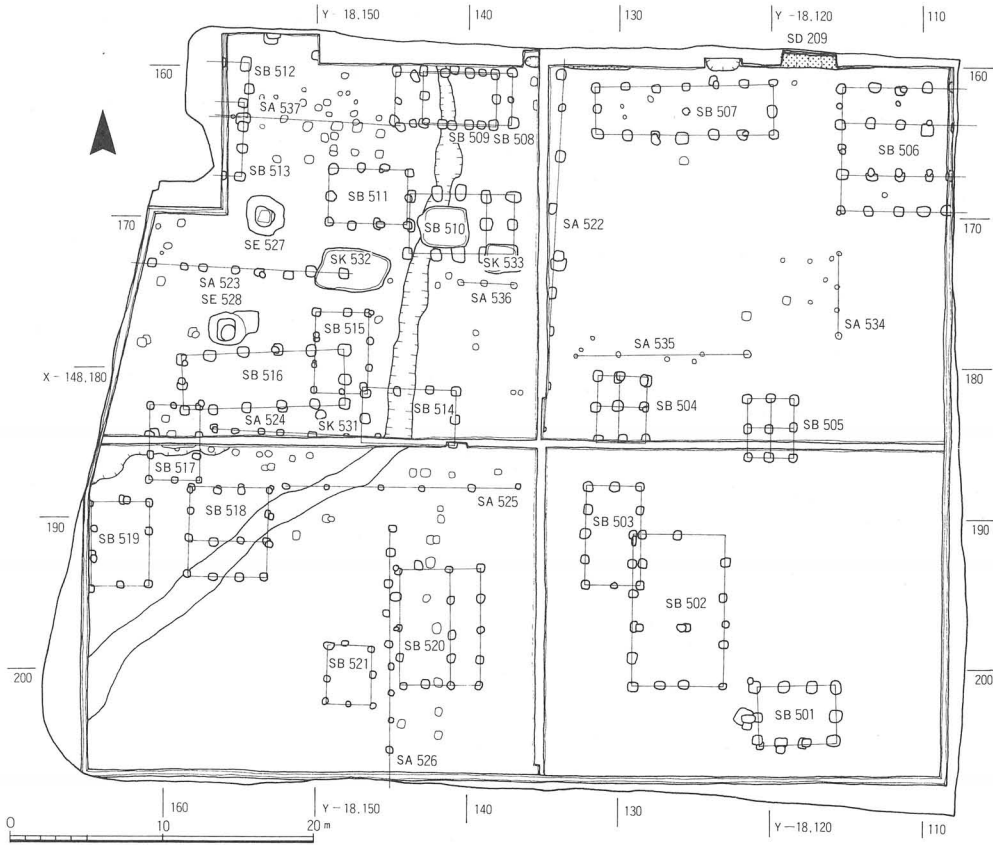


図30 左京七条一坊十六坪西北部調査遺構図 (1:500)・遺構変遷図

SB506西妻とそろえ、北側柱がSB506棟通りと35.6m（120尺）離れる。

SA534 SB506西妻とSB501東妻を結ぶ線上にある掘立柱南北塀で、3間（柱間は北から7.5+5+6尺）ある。

SB505 SB501の北方にある総柱の掘立柱南北棟建物で、桁行2間（6尺×2）、梁間2間（5尺×2）である。東側柱がSB506西妻柱筋と3m（10尺）離れ、桁行の中心はSB506南側柱筋とSB501北側柱筋の中央にある。

SB503 SB505の西南にある掘立柱南北棟建物で、桁行4間（6尺×4）、梁間2間（6尺×2）である。棟通りがSB506西妻柱筋と14.9m（50尺）離れ、北妻がSB506北側柱筋と23.9m（80尺）離れる。

SA526 SB503の西南にある掘立柱南北塀で、9間分（柱間6.5尺前後）を検出し、さらに南にのびる可能性がある。SB506西妻柱筋と29.6m（100尺）離れ、SB509西妻と筋がそろろう。

SA525 SB503北妻と筋をそろえる掘立柱東西塀で、5間（柱間10.5尺前後）ある。SA526北端と2.7m（9尺）離れ、SB503西北隅とは4.5m（15尺）離れる。

SB517 SA525の西にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（5.5尺×3）、梁間2間（5.5尺×2）である。棟通りがSB506西妻柱筋と44m（149尺）離れる。

B期 SB506は存続する。SB510を建て、これを基準にSB509・512をSB508・513に建て替え、あらたに504・516を建てる。

SB510 SB506の桁行中心線から西へ29.8m（100尺）のところに桁行中心を置く掘立柱東西棟建物で、桁行4間（6尺×4）、梁間2間（6.5尺×2）である。建物内にも柱があるが、間仕切りか総柱になるのか、中世の土坑と重複するため確定的ではない。十六坪西北部では最大の柱掘形をもつ。

SA536 SB510南側柱の南1.9m（6.5尺）にある2間の掘立柱東西塀。柱掘形が小さくSB510の南庇ではなく目隠し塀であろう。

SB508 SB509の側柱位置を踏襲した掘立柱東西棟建物で、桁行3間（7尺×2）、梁間2間（6尺×2）である。SB510と東妻柱筋をそろえる。

SB513 SB510の桁行中心線から西14.5m（49尺）に東側柱を置く掘立柱南北棟建物で、桁行3間（5.5尺×3）、梁間は2間であろう。

SB504 SB510の東南側にある総柱の掘立柱南北棟建物で、桁行2間（7尺×2）、梁間2間（6尺×2）である。SB510の桁行中心線の東9m（30尺）に西側柱を置く。北妻はSA536柱筋と6m（20尺）離れる。

SB516 北で大きく西偏する掘立柱東西棟建物で、桁行5間（7尺×5）、梁間2間（6尺×2）である。同じ振れの遺構はほかにないが、A・C期の建物と重複し、D期の建物と近接することからB期とした。SB510桁行中心線の西7.5m（25尺）に東妻を設定したとも考えられる。

C期 様相が大きく変化する。遺構は北で東偏する。西北部を掘立柱塀で仕切り、さらにその中を2ブロックに分け、各1棟の建物を置く。西南部には建物2棟を置く。

SA522 掘立柱南北塀で8間あり、柱間は不揃いで2.3~3.6m(8~12尺)。北端はSD209のすぐ南にあり、そこから23.4m(80尺)のびる。

SA537 掘立柱東西塀で4間分を検出し、さらに西にのびる。柱間は不揃いで2.3~3.5m(8~12尺)。東端はSA522と10.4m(35尺)離れ、東に延長するとSA522と直交する。

SA523 SA537の南10.3m(35尺)にある掘立柱東西塀で、10間分を検出しさらに西にのびる。柱間は不揃いで1.2~2.2m(4~7.5尺)。東端はSA522と7.5m(25尺)離れ、東に延長するとSA522と直交する。

SA524 SA523の南10.3m(35尺)にある掘立柱東西塀で6間ある。柱間は不揃いで1.2~2.3m(4~8尺)。東に延長するとSA522の南延長部とほぼ直交する。

SB511 SA522・537・523にかこまれた区画内の掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。

SB515 SA522・523・524にかこまれた区画内の掘立柱南北棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。東側柱がSA522と11.8m(40尺)離れる。

SB518 SA524の南にある掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6尺×3)、梁間2間(5.5尺×2)に南庇(出8尺)がつく。桁行中心線がSA522南延長部と20.6m(70尺)離れる。

SB521 SB518の東南にある掘立柱南北棟建物で、桁行2間(6尺×2)、梁間2間(5尺×2)である。東側柱がSA522南延長部と10.5m(35尺)離れる。

D期 ふたたび様相が大きく変わる。遺構は北でわずかに西偏する。SD207沿いにSB507を建て、その位置を基準にやや南に距離をとって、SB502・520・514・519・SA535を配する。

SB507 SD209南肩の南3m(10尺)に棟通りを置く掘立柱東西棟建物で、桁行6間(6.5尺×2)、梁間2間(5.5尺×2)である。中央に間仕切りがある。

SB502 SB507の桁行中心線上に棟通りを置く掘立柱南北棟建物で、桁行5間(7尺×5)、梁間2間(10尺×2)であるが、南妻面では、6尺+5.5尺+9尺の3間に割っている。北妻はSB507の北側柱筋と29.6m(100尺)離れる。

SA535 SB507・502の間にある掘立柱東西塀で、5間(柱間9.5尺)ある。SB502北妻と11.9m(40尺)離れる。

SB520 SB502の西にある掘立柱南北棟建物で、桁行4間(7尺×4)、梁間2間(5.5尺×2)に庇(出7尺)がつく。南妻がSB502南妻と筋をそろえ、東側柱がSB502棟通りと15.1m(51尺)離れる。

SB514 SB520の北にある掘立柱東西棟建物で、桁行3間(6.5尺×3)、梁間2間(6尺×2)である。東妻はSB520東側柱と筋をそろえ、棟通りはSB520南妻と17.8m(60尺)離れる。

SB519 SB520の西にある掘立柱南北棟建物で、桁行3間（6尺×3）、梁間2間（6尺×2）である。西側柱がSB520東側柱筋と23.7m（80尺）離れる。

その他の遺構 現時点で時期未確定の遺構をまとめて記述する。

SE527 SB511の西にある井戸。掘形は最大径2.5m・深さ2.75mの不整円形である。井戸枠は下から順に、円形曲物（直径50cm・高さ30cm）、転用した方形木櫃（一辺60cm・高さ40cm）、縦板15枚を上下2段の枠木で組んだ方形枠（一辺70cm・高さ1.7m）を埋設する。縦板上端部の裏込めには平瓦を並べる。埋土から多数の瓦、墨書土器などの土器類、鳥形などが出土した。

SE528 SE527の南南西にある井戸。掘形は直径2.5m・深さ1.5mの円形で、井戸枠は抜き取られている。抜き取り穴の下半が直径70cm・深さ50cmの円形、上半が一辺1m・深さ1mの方形を呈すことから、SE527と類似した構造であったと考える。抜き取り痕跡から多数の土器（平城宮土器Ⅱ）が出土した。

SK531 SB516の南にある土器埋納土坑。直径70cmの不整円形を呈す。土師器碗多数が出土した。

SK532 SB511・515の間にある土坑。東西5m・南北2.8mの不整長方形を呈す。埋土から多量の炭化物・土器片が出土した。SA532を切りD期以降である。

SK533 SA536と重複する土坑。東西2.6m・南北2.2mの不整長方形を呈す。埋土から少量の土器が出土した。SB510を切り、C期以降である。（加藤真二）

C 十五坪内の遺構

十五坪については、調査区南端において南北幅4m分調査したにすぎず、遺構の時期区分が困難である。七条条間北小路南側溝のきわまで建物がある。

SA488 七条条間北小路南側溝に架かる橋SX447の南方に掘立柱柱穴が5基並ぶ。掘形の規模が不整で柱間も不揃い。塀としておく。

SK449 土器埋納土坑。直径45cm・深さ19cmの円形摺鉢状を呈す。底に土師器碗（平城Ⅱ）1点が上向きで据わっていた。西方1.2mにも同形同大の土坑があるが、土器はなかった。

SB450 総柱の掘立柱南北棟建物で、桁行2間以上（6尺×2以上）、梁間2間（6尺×2）である。北でやや東偏する。柱穴が小規模で中世の遺構の可能性はある。

SB451 SB450より古い掘立柱建物で、南北棟の北妻部分と推定する。柱間は桁行5尺、梁間6.5尺である。

SB452 掘立柱東西棟建物で、桁行7間（6尺×7）、梁間2間（4尺×2）に北庇（出4尺）がつく。北で西偏する。西妻は十五坪の東西二等分線上にあり、東北隅の柱は南側溝南肩と50cmしか離れない。

SK453 調査区西半にある溝状の大土坑。土器多数・青銅製責（せめ）金具が出土した。

D 平安時代の遺構

SX217 平安時代前半の木棺墓。副葬品をもつ。奈良時代の井戸SE212の東南方約5m、東一

坊大路西側溝の名残の南北溝の西方約8mにあり、軸を溝に並行したわずかに北で西偏する南北に取る。掘形は長202cm、北面幅65cm、南面幅58cm、現存深さ19cm。木棺の法量は、側板・底板が腐食した厚さ2～3cmの暗灰色粘質土の範囲からみて、長175cm、北面幅56cm、南面幅49cm、高さ19cm以上である。遺体は遺存しないが北頭位であろう。木棺中央部の下には長53cm、径3cmの角材を主軸と直行して据えて棧としていた。副葬品は棺内北端に寄せ、その中央部にガラス玉1点、北東部に漆器方形箱を置き、南東部に承和昌宝（承和二（835）年初鑄）1枚・土師器椀・漆器椀を重ね、北西部に土師器甕・皿、南西部に須恵器平瓶・承和昌宝を置く。

3 遺物

出土遺物は多種多様である。奈良時代の遺物について出土地点で大別し、A・条坊関係遺構、B・十六坪内、C・十五坪内の順で記し、他の時代の遺物についてはDでまとめて記す。

A 条坊関係遺構の出土品

a 東一坊大路西側溝

現在コンテナ500箱分の埋土を水洗中であり、出土点数は変動する可能性がある。通常の土器（硯・製塩土器・墨書土器「神明膏」「道麻」「酒坏」など）・木器（刀子柄・砧・柄杓・折敷・曲物・皿・杓子・檜扇・下駄・横櫛・留針・「道」木印）・金属器（鉄刀子・鉄鑿・鉄族・鉄鋤先・鉄鎌・鉄釘・鉄石突・海老錠牡金物・銅帶金具・銅瓔珞）、瓦磚類のほか、祭祀関係遺物・生産関連遺物・木簡が多量にみられる。

祭祀関係遺物の年代は、同一層出土の土器や銭貨組成（和同開珎27・神功開寶20・萬年通寶6）からみて奈良時代後半～平安時代初頭である。内訳は各種材質の祭祀具がそろっており、人面墨書土器・ミニチュア土器（甕・竈・甌のセット）などの祭祀用土器・土馬、銅製人形2・鉄製人形15・小型素文銅鏡3・銅鈴2、木製人形19・斎串・刀形・鉾形2・共鳴槽をもつ琴形2・陽物・一本歯下駄などである。また動物骨も多量にあり、馬の四肢骨端部・下顎骨・歯が多く、牛・鹿の骨もふくまれる。

生産関連遺物は多種多量である。出土地点は、六条大路南側溝との合流部から橋SX218の間、橋SX314の北側40m、七条条間北小路側溝との合流部に集中する。内訳は、ガラス関係では埴塙・ガラス玉鑄型、金属器関係では甌炉（鑄造用）・炉壁（鍛冶ないし鑄造関連のもの）・鞆羽口・鉾滓・埴塙・鉛切り屑・砥石、漆関係では漆附着土器・刷毛、などがある。これらをどこから廃棄したのかについては慎重な検討を要する。

瓦磚類は、軒丸瓦6012B・6272B・6282Bb・6282Db・6285A・6291Ab・6304L・6314A・6345新2点、軒平瓦6641J・6663F・6663J・6668B・6691A 3点・6710A・6716C・6721A 2点・6721C・6721Gb・薬師寺253、隅切平瓦2点などがある。

木簡については別項に釈文と解説を掲げる。

b 六条大路

北側溝から木簡が出土した。別項に釈文と解説を掲げる。

c 七条条間北小路

北側溝から櫛・ガラス玉1点・土馬3点・6710C1点などが出土した。南側溝内祭祀土坑SK444から、馬の上顎3点・下顎1点・脚部などの骨、土師器甕1点・人面墨書土器1点（石で割った可能性あり）・須恵器壺（漆容器片あり）・須恵器杯がまとまって出土した。馬の顎骨は歯のみが残存する。人面墨書土器は、よくみられる祭祀専用の器形ではなく、日常用の転用である。出土土器の年代は奈良時代前半（平城宮土器Ⅱ）である。

d 東一坊坊間東小路

路面上の七条条間北小路北側溝の埋土、およびその上に形成された大土坑から6143A1点と埴がまとまって出土した。近接する別地点から廃棄されたものであろう。（加藤真二・岩永省三）

A' 条坊遺構出土の木簡

第252・253次調査で出土した木簡は現在整理中で、点数が確定していないが、削屑をふくめると数百点にのぼる見込みである。出土した遺構は六条大路北側溝と東一坊大路西側溝で、前者が3点のほかはすべて後者からの出土である。現在まで確認した主要な木簡の釈文を掲げる。

六条大路北側溝出土

- ① 茄子一斗 糖十□ (116). (14). 4 081
- ② □岐国寒□ (39). 19. 3 081

東一坊大路西側溝

- ③・主菜所 請「无」白大豆五合
□□
・□□用料□□ (154). (19). 4 081
- ④・黒木作□材木「導導」一間古□比木十四枝 「導」
[万カ]
[辟カ]
・ [辟カ] 得□板□□枚
十八日□相樽十村 「□」合六百六十一枚「□□」 (253). (25). 5 081
- ⑤・府進塩肆斗二升六合 十月
料者
・ 十月廿一日 214. 44. 5 031
- ⑥ □□十一 史二 府一 中九 左右二 □□二 雑工卅一 「□□」 (374). 14. 2 081
- ⑦・駿河国駿河郡柏原郷山□
[田カ]
・真高銭六百文 113. 21. 3 032

- ⑧・播磨国□
 ・養錢□□
 [六カ] (67). 17. 3 039
- ⑨ 敦賀郡返駅戸 □
 □人万呂□三斗 198. 30. 6 032
- ⑩ 宇和郡海部郷□知部万呂□□六斤
 [楚割カ] 207.25.4 032
- ⑪・大宰府貢交易油三斗□□
 [五升カ]
 ・ 宝龜三年料 (110). 28. 3 039
- ⑫・□上滑海藻五十斤
 ・ 天平二年閏六月七日 (172). 21. 5 019
- ⑬・周防国大嶋郡務理郷平群部岡調塩三斗
 ・ 天平勝宝五年九月 220. 28. 3 033
- ⑭ 布之理 71. 17. 3 032
- ⑮ 天平二年九月十九日来錢十四貫 (298). (30). 3 051
- ⑯ 大和国忍海郡 (琴形) 251. 37. 5 061
- ⑰ [部カ]
 良□郡隱
 恋□伎隱応伎道広広麻郡 (琴形) 255. 37. 5 061
- ⑱・宝字七年六
 月諸司繼文
 ・ 宝字七年六□
 諸司繼文 (題籤軸) (96). 36. 7 061
- ⑲・光光光光光光□佐伯宿祢赤麻呂
 外
 ・ 佐伯宿□ 伯麻呂「千字文勅員散」 218.21.5 011

東一坊大路西側溝出土の木簡は奈良時代の堆積土の各層から出土し、年紀も今のところ天平2年から宝亀3年と長さにおよぶ。内容も文書・荷札・付札・習書とバラエティに富む。⑤⑥の「府」や⑦⑧の「養錢」などからすると、衛士に関わると推定されるものや、⑩～⑬の荷札のように官衙に供給されたとみられるものをふくむが、①の「主菜所」のような文献にみられない部署名を記す木簡もあり、全体を一括して考えるべきか否かが課題である。また⑩の「大宰府貢交易油」、⑭⑮の琴形に墨書したもの、⑯の「諸司継文」の題籤軸など、これまでに類例のない木簡もある。さらに、こうした木簡がどこから廃棄されたのか、つまり周辺の遺構と直接的な関連があるのか、あるいは上流から流れてきたのか、といった問題もふくめて今後十分に検討していかなければならない。(寺崎保広)

B 十六坪内の出土品

a 土器・土製品

硯が約10点ある。SD209からの風字硯、SB420の柱抜き取り痕跡からの台付円形硯などである。SK214から漆を入れた多数の須恵器、SE527から墨書土器、SK531から埋納された多数の土師器碗が出土した。

b 木器・漆器

SK214から漆器片、SE527から井戸枠に転用した円形曲物(直径50cm・高さ30cm)・方形木櫃(一辺60cm・高さ40cm)・鳥形が出土した。

c 瓦 埴 類

軒瓦は6308C 1点・6710A 1点・6710C 2点などしかない。平城京の宅地としては埴が比較的多く出土するのが特徴的である。SE411の井戸枠裏込めからまとまって出土したほか、柱穴の抜き取り痕跡などから点々と出土する。SE527の縦板上端部の裏込めには完形の平瓦を並べており、埋土からも多数の瓦が出土した。

d 生産関連遺物

十六坪東端部から点々と生産関連遺物が出土した。金属器関係では炉壁(鍛冶ないし鑄造関連のもの)・鋳滓・坩堝、漆関係ではSK214出土の漆付着土器がある。金属器関係品の出土地点は東一坊大路最上層があふれた範囲にほぼ限定でき、坪内で工房の遺構も検出していない。

C 十五坪内の出土品

SK453から多数の土器片と青銅製責金具1点が出土した。SK449には土師器碗(平城宮土器Ⅱ)が埋納されていた。東端部で鋳滓・炉壁が少数出土している。

D 他の時代の遺物

包含層の出土品であるが、縄文時代晩期の石鏃1点、弥生時代の石鏃1点・蛤刃石斧・石庖丁がある。弥生時代の遺物は少量ながら点々と出土しており、下層に弥生時代以前の遺構があることをうかがわせる。

平安時代前半の木棺墓SX217では、木棺は腐食し暗灰色粘質土と化していたが、副葬品がまとまって出土した。ガラス玉1点、承和昌宝（承和二（835）年初鑄）2枚、漆器の方形箱・椀、土師器の椀・甕・皿、須恵器の平瓶である。（岩永省三）

4 まとめ

A 十六坪内の土地利用

第252～254次調査で、平城京左京七条一坊十六坪のほぼ全域の様相があきらかとなった。遺構の項で述べたように、十六坪の東北・東南・西南・西北の各部で遺構の様相が異なるが、各部間の区画施設の有無・種類などを根拠に、奈良時代を通じて坪の南半部・北半部がそれぞれ敷地としては一体であり、かつ東西に分けて用いていたと考える。

a. 坪の南半部 東西二等分線上の南北塀SA402は、一見、坪の南半を截然と別敷地に割るように見える。しかし従来、宅地割施設には道路か溝、宅地内区画施設には塀を用いる傾向が指摘されてきたから、SA402を宅地割施設と即断できない。A・B期にわざわざSA402に寄せてSB407・408・413・414を置いているのも不自然である。C期には坪の東西二等分線をまたぐSB404ができ、南半の一体性がより強まるが、宅地内区画施設としてSA402の位置を踏襲したSA403がのこる。SA402・403の東西で遺構の配置や密度が異なるのは、大型の建物を少数整然と配し、広い空闲地（儀式用？）を南にとった東半部（おもて）と、倉庫（SB413・428・432・433）や液体貯蔵施設（SB425）を配した日常生活をまかなう西半部（厨）との性格の差、空間の使い分けのためとみられる。

南半部の遺構変遷（A～D期）を通覧すると、東南部・西南部ともにB・C期間の変化が大きい。ただし東南部ではA・B期間、C・D期間の変化が小さいのに対し、西南部では各期間の変化がかなり大きい。これも東南部と西南部との性格差と関係し、フォーマルな部分は変化しにくいということであろう。

b. 坪の北半部 東北部と西北部も様相が大きく異なる。しかし両者の間にはSB506があり、溝・塀などの区画施設を検出していないことから、北半部は一体であったと考える。東北部の遺構は2時期にしか区分できず、その間の変化もほとんどないが、各期の存続年代幅と西北部のA～D期との対応関係が不明のため、北半部全体の遺構変遷が示せない。今後の課題である。暫定的に西北部のみの変化を見ると、西南部以上に各期間の変化が大きい。

c. 南半部と北半部の関係 坪の東半部では、坪を南北に二分する東西溝SD207をはさんで、南北の様相が一変する。西半部ではどうか。西南部・西北部ともに多くの建物が雑然とある点は共通する。しかし、西南部と西北部の間にはSD207の西延長部があると推定され、建物の方位についても、西南部では、北で西偏→北で東偏→北で東偏→振れがない、と変化するのに対し、西北部では、振れが無い→振れが無い→北で東偏→わずかに北で西偏と変換し、対応しない。こうした状況から、坪の南半部と北半部が別の敷地であった可能性を考えるが、SD207

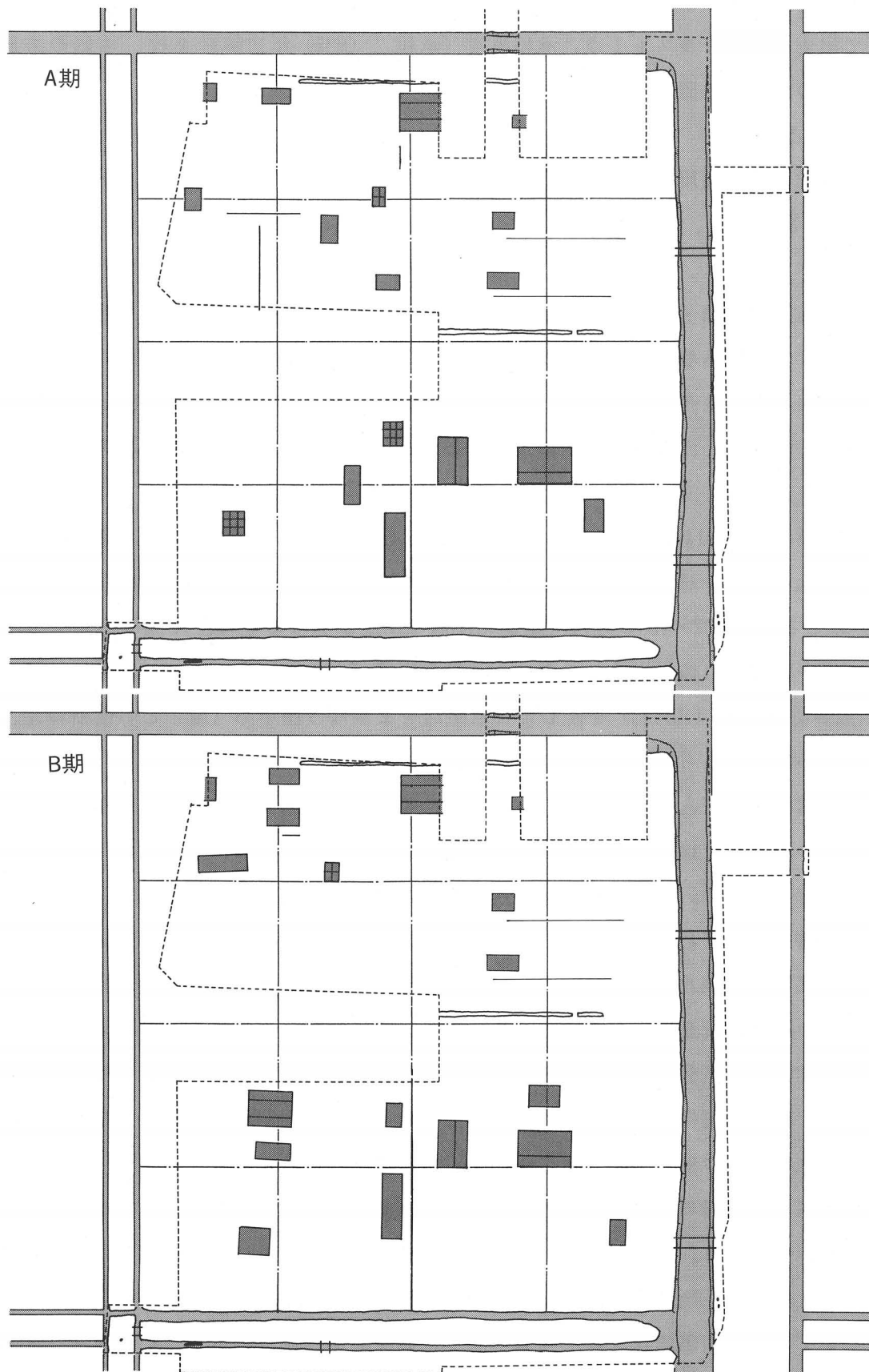


図31a 左京七条一坊十六坪遺構変遷図（上：A期、下：B期。便宜的に東北部は前半の状況を示した。）

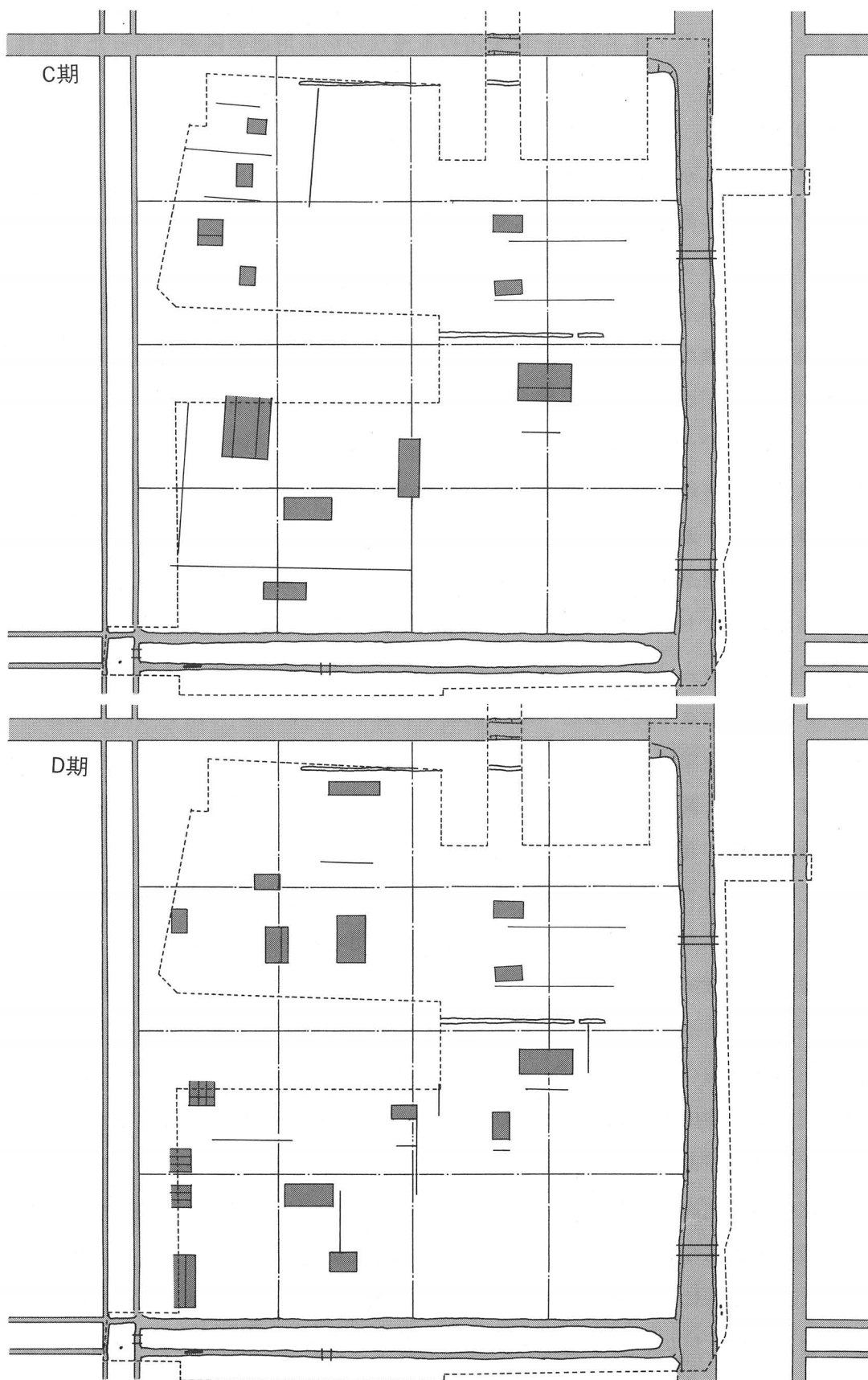


図32b 左京七条一坊十六坪遺構変遷図（上：C期、下：D期。便宜的に東北部は後半の状況を示した。）

には十六坪東南部の正殿SB220・221・305の東妻に対応する位置に出入口があり、行き来したようであるから、南半部・北半部が一坪を占める施設の別の用途の区画であった可能性も捨てきれない。

B 十六坪の性格

十六坪の性格はどうか。東一坊大路西側溝から官衙関係の木簡がまとまって出土し、東一坊大路西側溝や坪の東端部から多種多様な生産関連遺物が出土することから、何らかの官衙ないし官営工房の存在を推定する意見もある。しかし、建物の配置は官衙的ではなく、木簡や生産関連遺物の廃棄場所が不明であるし、かりに坪内に工房があったとしても、平城京の大規模宅地内の工房の存在がほかにも知られている現状からみて、邸宅の可能性は否定できない。邸宅とすれば主の地位はどれほどか。平城京における宅地班給基準は不明であるが、藤原京のものを参考にすれば、二分の一町規模なら中級官人、一町規模なら下級貴族の宅地となる。この問題については遺物の整理の進行を待ってさらに検討したい。 (長尾 充・岩永省三)

C 祭祀関係の遺構・遺物

十六坪をかこむ条坊遺構から多量の祭祀関係遺物が出土した。

東一坊大路西側溝における祭祀遺物の出土地点は、西側溝と六条大路南側溝・七条条間北小路側溝との合流点、および西側溝に架かる橋SX218・314の両側に集中する傾向がある。多量の祭祀遺物が、出土地点と至近の場所（道路上あるいは十六坪内？）で用いられたのか、平城宮をふくむ西側溝の上流地域から流れてきたのかは、重要な問題である。また多種多様な祭祀遺物が、いかなる祭祀と関わり、同時に用いられたのか否か。従来、金属製祭祀遺物は大祓などとの関連が指摘されてきたが、ここでの例もそうであるのか。今後、十六坪脇の西側溝に祭祀遺物が集積していったプロセスを解明するとともに、平城京内の他の集中出土祭祀遺物と組成の共通点・相違点をあきらかにし、上記の諸問題を解明する予定である。

また、多量の動物骨についてはどう考えるべきか。かつて、右京八条一坊の調査で今回同様に側溝から出土した多量の動物骨について、皮革生産と関連させた解釈が発表された。しかし、七条条間北小路南側溝の祭祀土坑SX444では、西側溝と同様な組成の馬骨が出土している。西側溝では祭祀土坑が検出されておらず、動物骨の分布も比較的広範囲ではあるが、祭祀との関連性も考慮する必要があるだろう。

七条条間北小路南側溝中の祭祀土坑SX444は、側溝に流水がない時に、溝底に穴を穿ち、切断した馬の頭部・脚部などを、人面墨書土器など祭祀に使用した土器類とともに納め埋めたものである。たんに側溝に馬の死体を捨てたのではない。長岡京でも二条大路南側溝と東二坊大路西側溝の合流部の土坑に、馬1頭を人面墨書土器・ミニチュア竈・土馬・鉄鏃・木製鳴鏑などとともに埋めた例がある。崇り神の怒りを鎮めるために、犠牲として馬や牛を殺して供え、のこった頭・脚を埋める慣行の存在が推定されているが、本例もそれに相当し、財力ある個人

の臨時祓に関わる可能性がある。十六坪をかこむ条坊道路上の4ヶ所、十六坪内の1ヶ所に土器埋納遺構がある。従来、宅地内や建物の入口の土器埋納については、胞衣（えな＝胎盤）埋納の可能性が考えられているが、道路上の例の性格については検討を要する。人を呪うための品物、あるいは再生を願って死産児を埋めた可能性がある。（祭祀遺物については水野正好氏の御教示を得た。）

（加藤真二・岩永省三）

II-4 左京六条・東一坊大路の調査 第251次

第252～255次調査に先だち、六条大路の北側で、東一坊大路の東西幅を確認するため、南北5m×東西45mのトレンチをあげ調査したが、明確な条坊遺構は確認できなかった。この地区はセリやガマの群生する湿地帯で、水分を多量にふくんだ表土および旧耕土の深さは60～70cmもある。その下層にあたる黄褐土混暗灰褐粘土層からは、中世の土器と巴瓦が出土した。トレンチの東端の部分では、この中世の地層の直下（地表面からの深さ約1m）で、砂質の地山が検出されたが、東壁から3.2mほどのところから西側は沼状の遺構SX102となる。その埋土からは、ごく少量ながら、奈良時代の須恵器や軒瓦も出土した。軒瓦は2点のみで、1点は型式不明の軒丸瓦、他の1点は6681A式の軒平瓦である。SX102の中央部分には、さらに複雑にくぼんでおり、斜行溝状の遺構SX103・SX104も検出した。これらの沼状遺構は、もっとも深いところで地表面から2m以上、東の地山面からの深さが120～130cmある。また、SX102の北東隅では、それよりも新しい井戸SE101を検出した。1辺が1.7m前後で、地山面からの深さも1.7mほどである。

（浅川滋男）

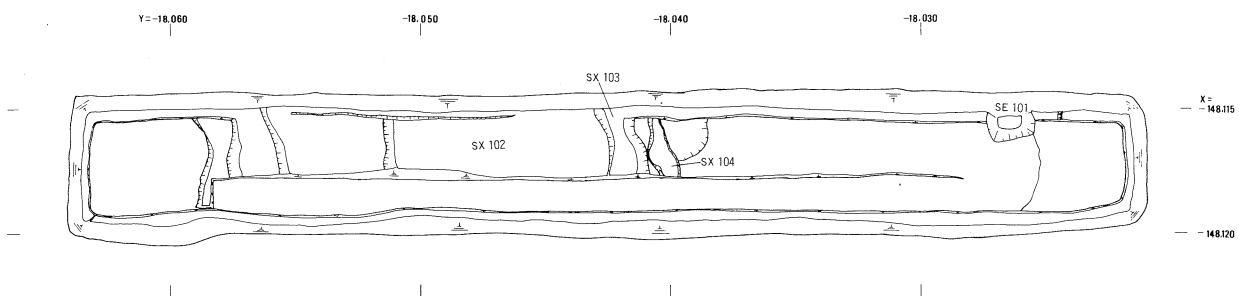


図32 第251次調査遺構図 1:300

II-5 左京一条二坊十坪の調査 第248-5次

家屋改築にともなう調査である。調査地点は法華寺の北方にあたり、遺存地割からの平城京条坊道路の復原によると、この左京一条二坊はやや不規則な地割りが考えられてきた。調査地付近の位置には、左京一条二坊の十坪（南側）と九坪（北側）の間を通る東西の小路が想定されており、敷地の北寄りに東西南北6m四方の調査区を設定した。遺物はほとんどなく、時期は不確かだが、小規模な掘立柱の南北塀1条（SA01）と東西棟建物1棟（SB01）、土坑1基（SK01）ほかを確認した（図33）。塀は柱間約2.1mの3間分で、柱筋は真北に対してやや東偏する。東西棟はほぼ正東西に桁行方向をおき、その柱間は約2m、梁間は妻柱を検出していないが、2間分で約3.6mである。発掘区東壁位置で北側柱が未検出であるが、4間以上の東西棟になると考えられる。なお、当初想定していた東西小路は検出できなかった。

出土遺物はほとんどなく、取り上げるべきものもない。ここで問題にしたいのは、遺構検出面の地盤である。調査の最終段階で、四周の壁際を掘り下げ、土層の観察をおこなった結果、遺構が人工的に互層に積み上げられた地盤を掘り込んでいることが確かめられた。この人為的な地盤はどのような性格をもつのであろうか。本調査区より東側の第118-4次調査では、地山が一段下がり、その凹部に黄褐色の土があって、その面で奈良時代の遺構を確認している。調査者は、これを掘込み地業とみて、礎石建物の遺構と考えている。今回の調査で認められた互層の地盤についても、当初は掘込み地業であるとも考えられた。かりに掘込み地業であるとするれば、SB01は礎石建物の可能性もあるわけだ

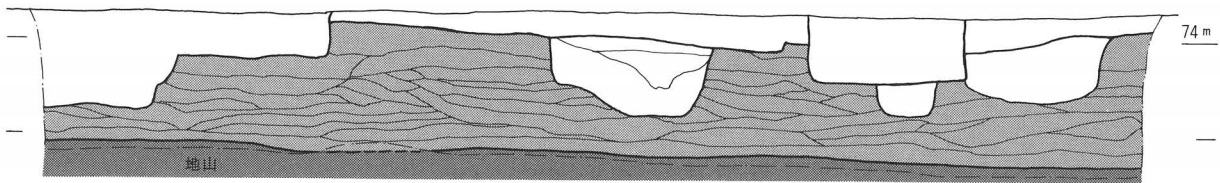
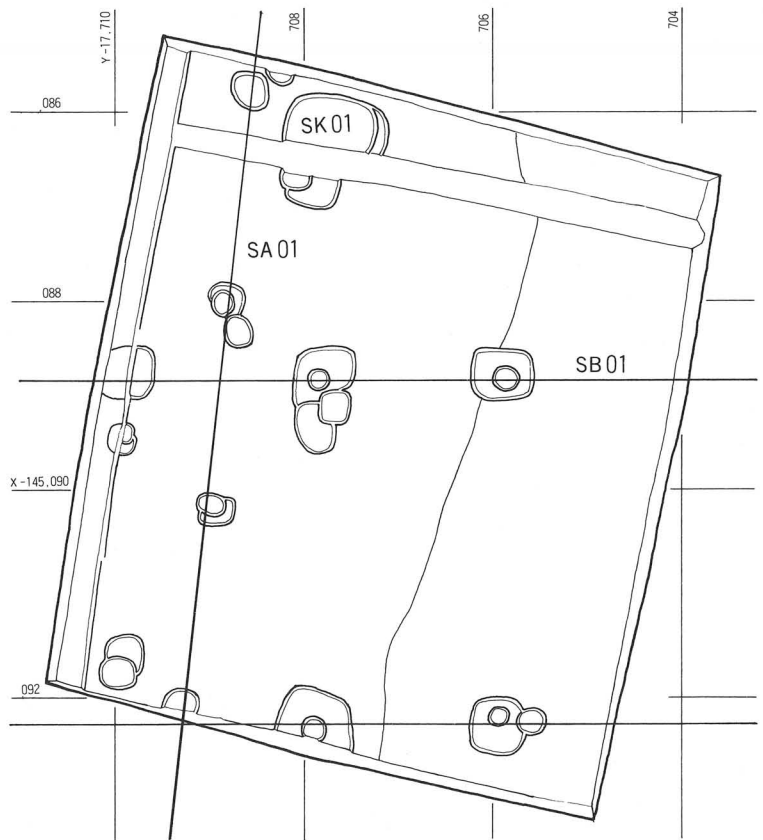


図33 第248-5次調査遺構図(1:80)と層位図(1:40)

が、その柱掘形は掘立柱建物の形状を示している。また、梁間2間の礎石建物ならば、掘込み地業の北端が調査区内におさまるべきと思われるが、調査区全面にわたって同じ地盤であり、底柱が存在しないので、北庇つきの建物ともみなしがたい。

今回検出した互層地盤については、削平された古墳にともなう遺構とは考えられないだろうか。土層をみても、礎石建物の基礎としての地業のように、水平層の版築ではなく、土層が細かな単位に分れるとともに、水平ではなく傾斜をもった堆積を示す（図33）、古墳の墳丘盛土の状況に類似しているのである。

今年度、法華寺新町で別に2ヶ所の調査を実施した。第248-7次調査では、溝中に奈良時代初頭の土器がまとまって捨てられていたが、この状況は東方の木取山古墳の周濠埋立土に類似するとの指摘がある。また第248-8次調査でも地山の落ちが確認され、完掘しなかったが、古墳の周溝ではないかという所見を調査者はのべている。第118-4次調査の深さ70cmの掘り込み地業とされる遺構についても、断面図をみる限り、やはり版築風ではなく、それぞれ30cmほどの厚さをもつ大きな2層に分れるにすぎず、これを古墳の周溝埋立土とみることもできる。

コナベ古墳の東西および北辺には陪冢がめぐっているが、南側にあたるこの地域には、現在のところそれは認められない。しかし、南側にもコナベ古墳の陪冢、あるいは木取山古墳などの中規模の前方後円墳などが他にも存在していたことは、当然考慮しておくべきことであろう（図34）。（岸本直文）

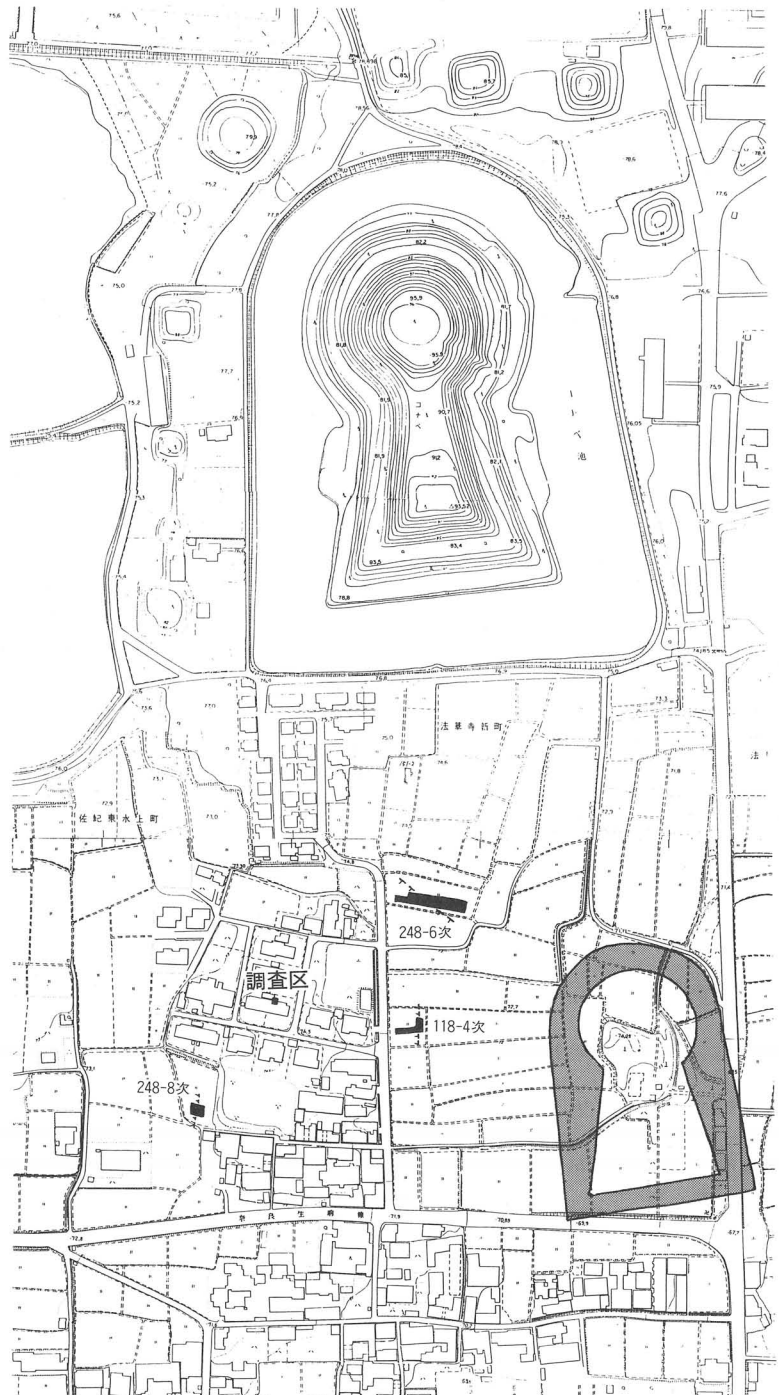


図34 コナベ古墳南方の調査 1:8000

II - 6 左京一条二坊十六坪の調査 第248-7次

住宅新築にともなう事前の発掘調査である。法華寺集落北方で、平城京左京一条二坊十六坪内にあたる。基本的層序は上から、近年の盛土、旧耕土、床土、炭混褐色土の整地層、明黄褐粘質土の地山である。東端では現地表面から深さ70cmで地山にいたり、遺構も地山に営まれているが、西に行くにつれ地山面が深くなり、炭や礫の混じった褐色土の整地が厚く堆積する。その中に大量の土器がふくまれていた。

発掘区中央は近年重機で攪乱されており、検出した主要遺構は東西溝SD62501条のみである。東西溝は幅3m以上、深さ1.2mで、さらに発掘区の北へひろがる。国土座標の東西に対し、東で15度南へ振れる。溝の埋土は大きく上下二層に分けられ、下層には炭が多量に混入した土層があって、土器が大量に出土した。

SD6250から出土した土器は平城宮Ⅱ期に属し、埴塼・漆付きの土器をふくんでいる。また、溝の埋土には炭が混入しており、近辺に工房のあった可能性が大きい。

発掘区西端の整地土から出土した土器は平城宮Ⅳ～Ⅴ期に属し、二彩陶器2個体(3片)をふくむのが注目される。大型の盤と皿の破片で、この付近は一般の宅地とは異なる性格をもっていたものと考えられる。

出土した瓦は表4のとおりである。

東西溝SD6250は条坊と方位が一致せず、右図のように、現状の周辺の地割りも条坊に沿ったものではなく、東で南へ、北で東へ振れた不整形な地割りが続いており、すぐ北のコナベ古墳などに関連する溝ではないかと推定される。(山岸常人)

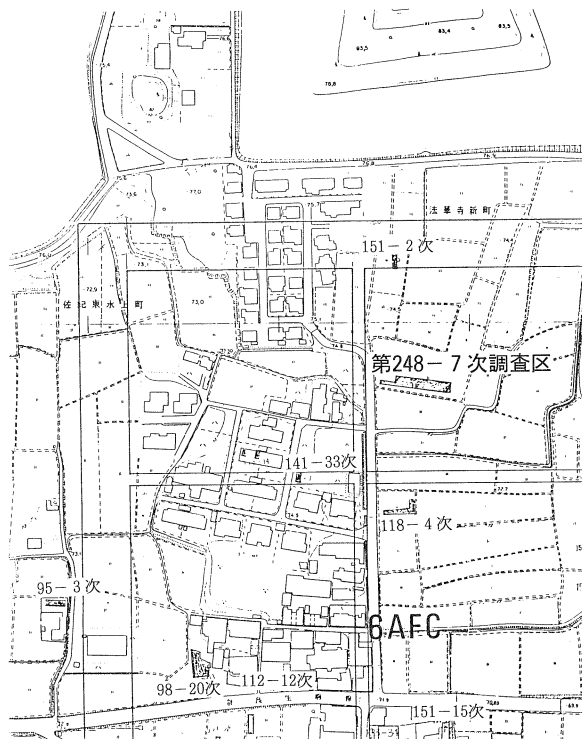


図35 調査位置図

表4 248-7次 出土瓦埴集計表

軒丸瓦		軒平瓦		丸瓦	
型式	種 点数	型式	種 点数	重量	
6133 Ka	1	6555重弧文	1		79.4kg
6291 A	4	6641 C	1	点数	628
6301 C	3	F	1		
6311 F	1	6667 A	3	平瓦	
		6671 C	3	重量	155.8kg
		6679 B	1	点数	1,633
		6681 B	2		
		6685 B	1	埴	
		6714 A	5	重量	7.7kg
		6716 A	1	点数	16
軒丸瓦計		軒平瓦計			
9		19			

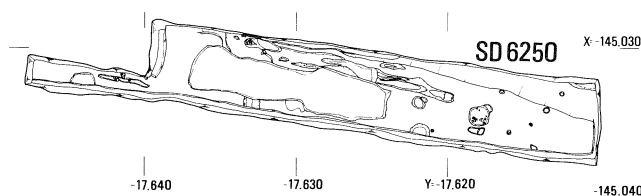


図36 第248-7次発掘調査遺構平面図 1:500

II - 7 頭塔の調査 第257次

頭塔では今年度、北面第3～6段の解体修理を実施したが、それともなう発掘調査はおこなっていない。以下には、解体修理で得られた主要な知見を報告しておく。

1) 北面第4段の基底石には、前面が平らで、おおむね幅50～60cm内外の石を選び、前面をまっすぐにそろえて、ていねいに施工していることがわかった。完全に地中に埋まっているか、上端が第3段テラス面からごくわずかに顔をだしているにすぎない基底石が、石積上部に比べてていねいに施工されていることは、工法上、注目に値する。北面第4段では、腐植土化していた基底部前面を全面的に排土した結果、このことがあきらかになった。これまでに実施した断ち割り調査でも、東面第3・5段および北面第3段では、基底石が地中に埋まるか、それにちかい状況を確認しており、同様の施工をおこなっているものとみられる。

2) 北面第5段中央付近に据えられている、表面に円形突起がある大型の石材の裏側に、円形の凹みがあることがわかった。この凹みは、表面の突起とほぼ同位置にあり、外径は水平方向430mm・鉛直方向420mm、内径は水平方向400mm・鉛直方向390mm、深さ30mmである。ちなみに表面の円形の突起は、外径が水平方向400mm・鉛直方向395mm、内径が水平方向・鉛直方向とも360mm、高さ20mmであり、裏面の凹みのほうがわずかに大きい。また、表面・裏面ともに、周縁部以外は鑿で平滑に仕上げている。この石材は、従来から解釈が難しかったものである。ただ、目に触れることのない裏面のこうした仕上げから考えると、頭塔のために製作された材というよりも、他所からの転用材である可能性がたかくなったといえよう。しかし、転用材だとしても、その本来の用途や、頭塔のこの位置に据えられた意味などは、いぜん不明である。

3) 遺物としては軒平瓦6732F（東大寺の瓦と同範）が2点出土した。このうち1点は第4段積土からのもの。なお、昨年度の第247次調査の概報では報告できなかったが、北面第1・2段修理工事の過程で、表層土から大型の土馬1点出土したことをつけ加えておく。

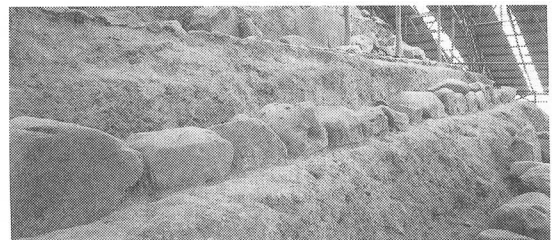


図37 北面第4段基底石

(小野健吉)

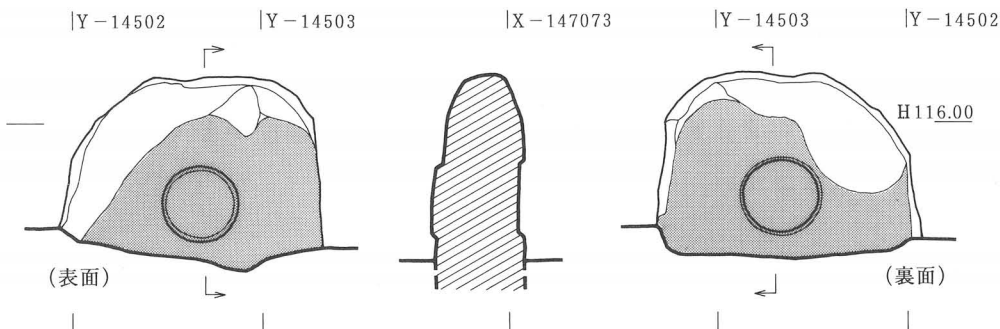


図38 北面第5段中央石 (1:40) 網カケ部はノミ仕上げ面

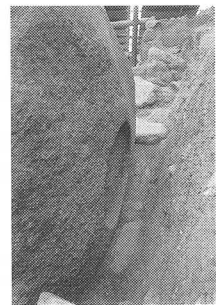


図39 同左・裏面

II - 8 右京一条二坊四坪の調査 第248-12次

集合住宅建設にともなう事前調査である。平城宮西面大垣に接する地で、西一坊大路西側溝の検出を主目的として、敷地の西半に調査区を設定した。

1 層 位

基本的な層位は、耕土（厚さ約20cm）、淡灰黒色砂質土、黄灰褐色粘質土（以上床土、厚さ約14cm）、灰褐色粘質土、黄褐色粘質土、茶褐色砂質土、灰褐色砂質土、灰白色粘土、暗灰褐色粘土、黒色粘土の順となる。黒色系の粘土の上に茶褐色砂質土を主体とする砂層がのる。主要な遺構はこの茶褐色砂質土を上で検出された。

2 遺 構

主な遺構は掘立柱建物・礎石建物各1棟、溝5条である。

SB2525 東西両面庇付南北棟掘立柱建物。桁行4間分を検出した。柱間寸法は桁行で8尺、梁行で9尺であり、庇の出9尺とする。柱掘形は身舎で約1.4m四方、庇で約1.1m四方の方形を呈している。柱はすべて抜き取られていた。

SB2526 東西両面庇付南北棟礎石建物。掘立柱建物の南から4番目の柱掘形を、礎石据え付け掘形が切りこんでいた。掘形は方形で、一辺約1m。根石がのこる。今回は妻部分の3個の掘形を検出したのだが、北壁にかかって次の掘形が一部確認された。今回の調査区の北約12mでおこなわれた平城宮第103-14次で、この建物の北延長部が検出されている。妻から5本目に相当する柱列がみついているのである。掘形からは奈良時代の瓦が出土した。時代の決め手となる遺物はないが、2棟とも奈良時代の建物と考えられる。

SD2527 古墳時代の素掘溝。幅約1.4m、深さ約0.4m。

SD2528 灰白色粗砂を埋土する素掘溝。他の遺構がのる茶褐色砂質土の上、黄褐色粘質土を切ることから年代は中世以降であろう。

SD2530 西一坊大路の西側溝。かろうじて長さ4mほどを検出した。これより北は削平をうけ、のこっていない。

SD2529・2531 浅い溝で、SD2527とほぼ直交する斜行溝であり、古墳時代の遺構である。

3 遺 物

SD2527付近の包含層から軒丸瓦6308 I 型式1点が出土したが、瓦の出土量は少ない。土器では、SD2527から古墳時代の土師器がまとまって出土した。ただし、小破片が多く、器表の磨滅が著しいため、図示できる個体はない。

4 ま と め

今回の調査で、西一坊大路西側溝から西へ12mほどのところに、東西両面庇付大形建物（南北棟）の存在することがあきらかになった。北の第103-14次調査では礎石据え付け掘形しか

検出していないが、掘形が一部重複するとともに、大きさが掘立柱建物の柱掘形に近似するところから、今回検出したように、掘立柱建物が礎石建物に建て替えられた可能性がある。このように考えると、掘立柱建物は、少なくとも北に7間以上のびることになり、北に3間分ずらせて礎石建物に建て替えられている。

従来、秋篠川による削平で、本調査区周辺での遺構検出例はほとんどなかった。今回の調査は、宮に接した西側の土地利用を考える上で、貴重な資料を提供したものと見える。

(杉山 洋)

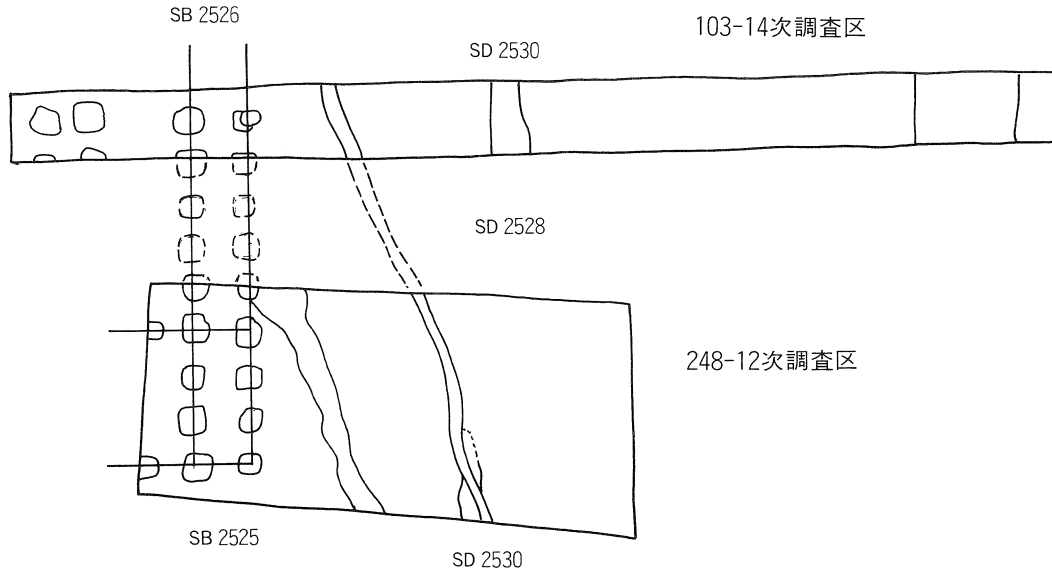


図40 調査位置図 1:400



図41 第248-12次 遺構平面図 1:200

Ⅱ－9 右京一条二坊一坪の調査 第248－2次

集合住宅建設の事前調査である。調査地は右京一条二坊一坪の東辺部にあたり、西一坊大路西側溝の確認を目的として、南北12m×東西8mの調査区を設定した。

調査区の基本的な層位は、上から耕土、床土、黄灰褐色砂質土の遺物包含層となり、地表面下約50cmで黄灰色粘質土の遺構面に達する。検出した遺構は、南北溝2条、掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条と、土坑2基である。SD921は西一坊大路西側溝で、幅約3m、深さ約0.5mを測る。堆積は上下2層に分かれ、下層の溝は断面がV字形に近く、一段深くなる。その西方では、築地の痕跡は検出できなかったが、掘立柱塀も存在しないので、一坪の東限をかぎる区画施設は築地であった可能性が大きい。SD2510は調査区西端の南北溝で、幅約1.1mで、深さが0.2m。調査区南端を西に拡張して、溝の西肩を確認した。築地の西雨落溝と思われる。SA2515はSD921の東肩にある掘立柱南北塀。柱間は8～13尺と不揃いで、方位も北でやや西にふれている。SD921の下層埋土より新しく、柱抜取穴から奈良時代末～平安時代初頭の土師器が出土した。上層の溝に並存するものか。SB2511は南北棟で、桁行、梁間ともに3間以上。SA2515と同様、やや西にふれている。柱間寸法は桁行が9～12尺、梁間が4.5尺。時期は不明だが、築地の想定位置に重なるので、長岡京遷都以後の遺構とみるべきであろう。

なお、今回の調査で検出した西一坊大路西側溝SD921の溝心座標は、Y-19135.3となる。おもな出土遺物はSD921から軒平瓦6663C bと型式不明の軒平瓦が各1点、SD2510から奈良時代後半の土馬が1点、SD921の東肩の粘質土層から楔形石器または細石刃核となる石器が1点である。

(玉田芳英)

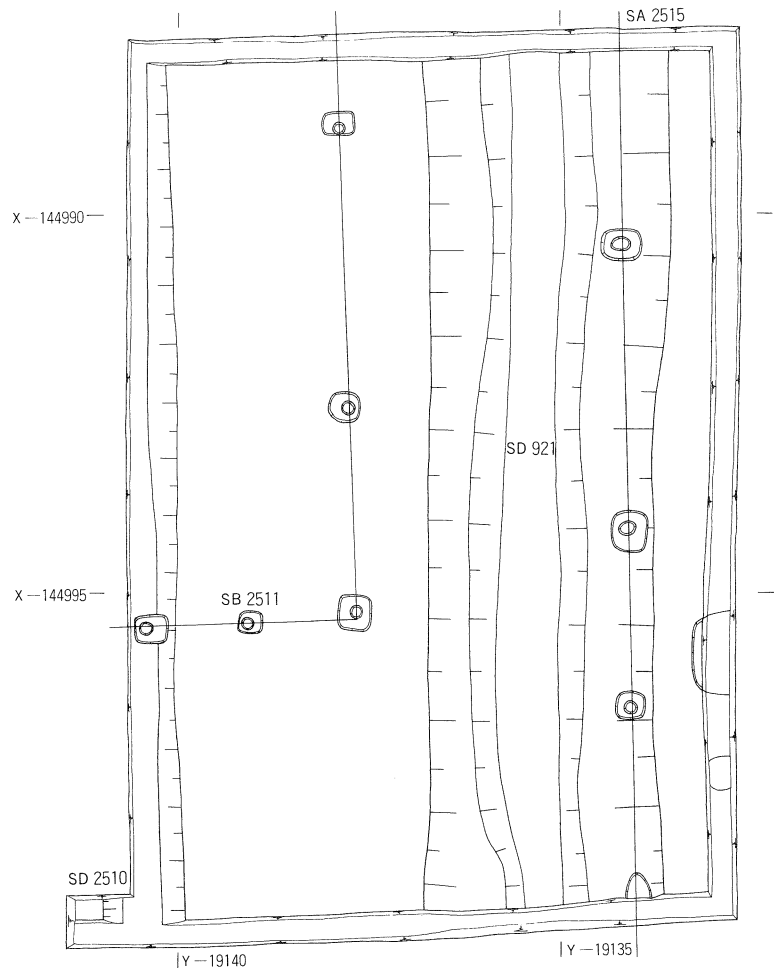


図42 第248－2次発掘調査遺構平面図 1:100

II-10 右京三条一坊八坪の調査 第248-11次

住宅改築にともなう事前調査である。調査地は若犬養門から二条大路を挟んで南西に位置し、坪の北端にあたる。南北約7.5m、東西約3mの調査区を設定し、平成6年11月7日から10日まで調査をおこなった。層序は宅地造成のため地表から約40～

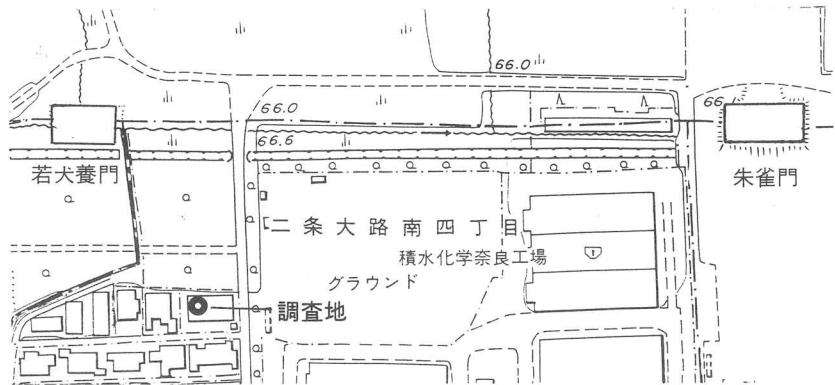


図43 第248-11次調査位置図 1:3000

50cmの深さまで盛り土が置かれ、その直下に地山の黄灰粘・砂質土が堆積する。攪乱のため、奈良時代の遺物包含層や整地土は部分的にのこるのみで、遺物も瓦が少量出土したにすぎない。

遺構は最近の土坑数基のほか、時期不明の置石SX2520、斜行溝SD2521を検出した。SX2520は長径60cm以上の石を、ほぼ同じ規模の浅い土坑に据えたものである。SD2521は調査区の南西隅で北端を検出し、最終日に調査区を一部南へ拡張して性格を確認した。その結果、SD2521は北西から南東にのびる溝であることが判明した。埋土中に弥生時代後期の土器片が大量に堆積しており、今回の調査部分のみで整理箱11箱分が出土した。弥生式土器は周溝に投棄されたものと思われ、このことからSD2521はこの時期の方形周溝墓の一部と考えられる。

(白杵 勲)

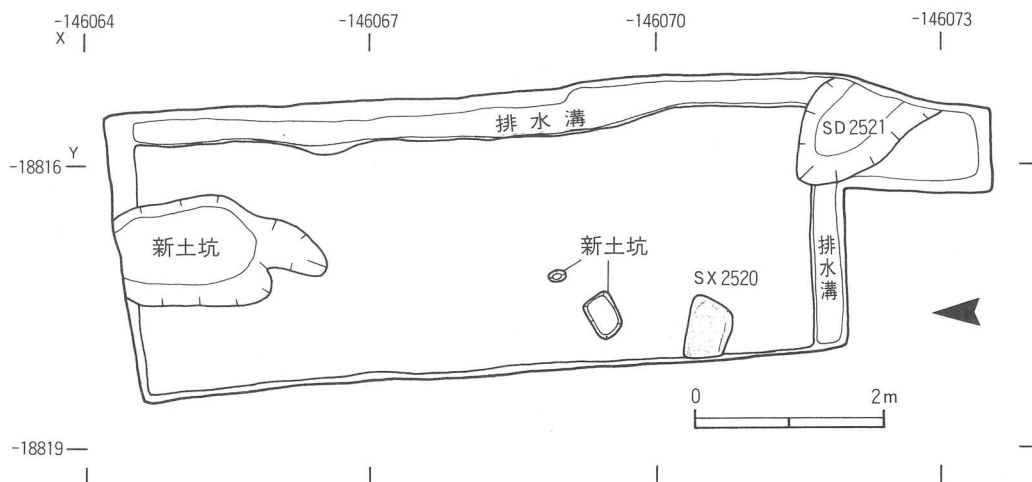


図44 第248-11次調査遺構平面図 1:80

Ⅱ-11 西一坊大路の調査 第248-14次

住宅改築にともなう事前調査である。調査地は平城宮西面中門と北門との間の大垣に西接する位置にあたり、西一坊大路が想定された。周辺におけるこれまでの調査では、南の第103-14次調査で大垣の東西両側溝を、北の第118-29次調査で西側溝を検出しており、これらとの関係が問題となる。発掘区は両側溝確認のため2ヶ所に設けた。東区は3×7m、西区は4.5×12mの各東西トレンチで、面積の合計は75㎡である。

基本的な層序は、上から盛土、耕土、床土、暗黄褐土をへて遺構面にいたる。現地表面下0.7～1.0mである。

西区では、トレンチの大半が建て替え前の建物の基礎で破壊され、西一坊大路の路面上で土坑1基を確認したのみであるが、トレンチ西端で西側溝とみられる南北溝を検出した。溝幅は70cm、深さは検出面から20cmしかのこっていない。一方、東区には溝幅5.6m、深さ0.5mの南北溝があり、これを東側溝と判断した。溝の堆積土は4層に区分できるが、掘り下げた範囲では遺物をほとんどふくんでいない。

両側溝の座標を、これまでのものとあわせて示すと下のとおりである。

	次 数	X座標	Y座標		次 数	X座標	Y座標
東側溝心	248-14	-145271.0	-19109.9	西側溝心	118-29	-145121.0	-19132.2
	103-14	-145392.0	-19107.9		248-14	-145275.0	-19132.5
			103-14		-145392.0	-19132.2	

今回の発掘区における西一坊大路の幅は、溝心々間で22.6m、路面幅は20.5mを測る。西側溝の心は従来の成果とほぼ一致し、南北方向の方位にのるが、東側溝の心はやや西に寄る。これは同溝が北でやや西へ溝幅をひろげていることを示している。なお、今後の周辺の成果とあわせて検討すべきであろう。

(寺崎保広)

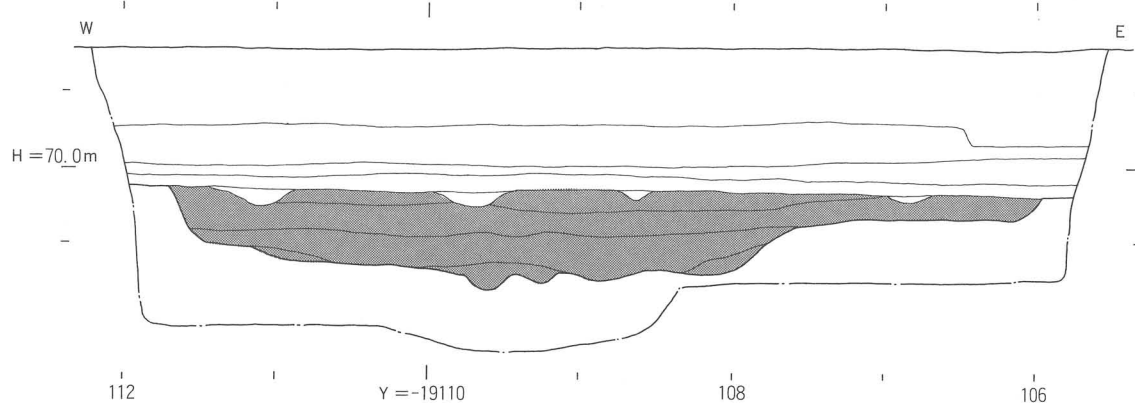


図45 西一坊大路東側溝土層図 1:50